

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊

伊治城跡

—昭和53年度発掘調査報告—

宮城県多賀城跡調査研究所

表紙写真
伊治城跡北辺土塁を北
から望む(第1次調査)

序 文

伊治城は古代陸奥国に造営された城・のうちで、短時に造られるなど造営状況が正史上に明らかにうかがえる城である。その擬定地には種々の説があったが、現在は栗原郡築館町城生野の地を伊治城跡とする考えが定説になっている。

東北古代史の解明のためには、多賀城の調査のみならず、多賀城と強い関連を持つ諸遺跡の調査も不可欠のことである。このことについては、文化庁や多賀城跡調査研究指導委員会での指導もあり、当研究所としては、昭和49年を第1年次とする多賀城関連遺跡調査第1次5か年計画を策定し、逐次調査にあたっている。伊治城跡の調査も桃生城跡などとともに本計画に組みこんできたものである。昨年度は北辺に土塁と大溝が確認され、また「城厨」なる墨書き土器の発見などもあり、古代城・として確証を得るなどの成果を挙げることができた。本年度は第1次5か年計画の最終年次として、また、伊治城跡としては2年次目として築館町教育委員会と共に発掘調査を実施したものである。

本年は、遺跡の中央部分を調査したが、その結果伊治城の存続期8世紀末頃の堅穴住居跡群が発見された。また、これらの構造から「常陸口」^(常陸)の墨書き土器の発見があった。これは「日本後紀」延暦15年(796)の「相模、武藏、上総、常陸、上野、下野、出羽、越後の国民九千人を陸奥国伊治城に移す」という記事とのかかわりで興味深いところである。さらに城・官衙遺跡として多賀城跡に次いで発見された「漆紙」も地方官衙の活動の実態を知る上で極めて貴重なものといえよう。本報告書は今年度の調査成果をまとめたものであり、伊治城の研究ひいては東北古代史の解明の一助となれば幸である。

発掘では伊治城跡の規模・構造の究明までにいたらなかったが、ひきつづいて多賀城関連遺跡調査第2次5か年計画の第1年次として、来年度も伊治城跡の第3次調査を計画しており、今後も本遺跡の解明に努める所存である。

発掘調査にあたり種々有益な御指導・御助言を賜った文化庁・多賀城跡調査研究指導委員の諸先生をはじめ、築館町・築館町教育委員会・築館町文化財保護委員会の関係諸氏、電気探査の実施にあたり協力をいただいた奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター西村康・岩本圭輔両氏には厚く感謝申し上げる次第である。さらに、快く調査地を提供して下さった地主の佐藤敏夫・千葉三郎両氏や炎天下で直接発掘の鍼をとられた地元の方々にも心から感謝の意を捧げるものである。

昭和54年3月

宮城県多賀城跡調査研究所長
所長 後藤 勝彦

序 文

伊治城跡の発掘調査は昭和 52 年度にひきつづいて本年度も行われ、多くの成果をあげた。その結果、本町城生野を伊治城跡とする従来の見解がほぼ妥当であるとされるにいたったが、未だその規模や範囲等は明確ではない。今後の調査の進展を待ちたい。

昭和 52 年度は約 4.5a の調査を行い、本年度はさらに約 8a の面積を調査した。しかし、東西約 700m、南北約 650m の台地に広がると思われる伊治城跡の全面積からすれば、この調査は千分の一にも満たないであろう。このせまい調査面積からその全容を知ることは不可能に近いが、徐々に伊治城跡と推測できる遺構・遺物が発見されつつあることは誠に喜ばしいかぎりである。

また、今年度の調査による「漆紙」の出土は特筆すべきことであろう。これは昭和 53 年度に多賀城跡ではじめて確認されて以来、全国第三番目の発見である。多賀城跡出土の漆紙は反故紙で文字が書かれているが、その中に「此治城」と読まるものがあり、興味深いことである。この漆紙の出土といい、此治城の文字といい、城生野が伊治城跡であるという確証が固められるものと考えられる。

昭和 54 年度も調査が継続されると聞いているが、今後もますます解明されることを強く期待する。当町としてもそのための援助は惜しまないつもりである。

おわりに、このたびの調査にあたられた多賀城跡調査研究所の皆さまや調査に際し、調査地を快く提供された地権者の千葉三郎氏と佐藤敏夫氏、並びにつねに御協力を惜しまなかつた地元の方々に深く謝意を表するものである。

昭和 54 年 3 月

宮城県塗館町教育委員会

教育長 鈴木 健吾

目 次

序文（宮城県多賀城跡調査研究所長）

序文（築館町教育委員会教育長）

I.	調査要項	2
II.	調査計画	3
III.	遺跡の立地と中佐の経過	7
IV.	発見された遺構と遺物	12
1.	堅穴住居跡	12
2.	掘立柱建物跡	33
3.	土・跡	34
4.	溝跡	36
5.	井戸跡	36
6.	ピット群	37
7.	第1層・第2層出土の遺物	37
V.	考察	40
1.	遺物について	40
(1)	土器の分類	40
(2)	住居跡における土器の様相とその年代	41
(3)	遺物からみた遺跡の性格	42
2.	遺構について	43
(1)	各遺構の年代	43
(2)	住居跡について	44
VI.	調査のまとめ	46
VII.	補	47
1.	西外郭線の電気探査について	47
2.	伊治城および栗原郡に関する古代史年表	48
〔付章〕 多賀城関連遺跡第1次5か年計画の成果		50

写真図版

I 調 査 要 項

1. 名 称 伊治城跡第2次調査
2. 所 在 地 宮城県栗原郡築館町城生野
3. 調 査 期 間 昭和53年7月3日～8月4日（発掘調査）
昭和53年11月11日～11月13日（電気探査）
4. 調査主体者 宮城県教育委員会教育長 北村 潮
5. 調査共催者 築館町教育委員会教育長 鈴木健吾
6. 調査顧問 東北大名譽教授・多賀城跡調査研究指導委員長 伊東信雄
7. 調査担当者 宮城県多賀城跡調査研究所長 後藤勝彦
8. 調 査 員 築館女子高・金野 正、古川工業高校・三宅宋議、東北歴史資料館・工藤雅樹、藤沼邦彦、岡村道雄、多賀城跡調査研究所・桑原滋郎、進藤秋輝、平川 南、鎌田俊昭、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清
9. 調査協力者 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター・西村 康、岩本圭輔（電気探査）、地主・佐藤敏夫、千葉三郎、区長・千葉賢一、菅原賢治、照明寺住職・松森明心
10. 調査参加者 千葉正秋、千葉温功、佐々木尚見、佐藤信行、松川美波、加藤利彦、小野寺一男、伊藤 博、伊藤正吉、高橋次男、千葉 清、高橋佐一、菅原正男、佐藤貞雄、佐藤清人、大場正美、白鳥悦雄、千葉伝乃丞、千葉三郎、千葉善明、菅原孝子、加藤きよえ、菅原てつ子、鈴木すず子、千葉ちえ子、佐藤もと子、千葉みゆき、菅原とく子、佐藤まさ子
11. 本遺跡の地区割は富野公民館前の任意の点を発掘基準点と定め、この地点を原点(0,0)とする直角座標を組んで割り出している。発掘基準線の南北軸はN2.5°W（Nは第X系座標北）である。
12. 本書に収録した挿図のうち、遺構図については1/60、遺物実測図については1/3に縮尺を統一した。また遺物実測図にはすべて観察表を付け、出土地区・層位・特徴などを明確にした。
13. 本書の執筆・編集には当研究所の後藤勝彦・桑原滋郎・進藤秋輝・平川 南・白鳥良一・鎌田俊昭・高野芳宏・古川雅清があたり、佐藤博子・猪股みよ子・千葉裕子・石川勝子・丑田恭子・後藤 昇・石本 弘・佐々木和恵・浜田秀一・高橋みずほがこれを授けた。

II 調査計画

当研究所は昭和44年以来多賀城跡の継続的な調査研究を行っており、その結果多賀城の実体が徐々に解明されつつある。また多賀城に対する理解をより深め、かつ東北古代史の研究をさらに促進させるために、これと併行して多賀城に関連する遺跡の計画的な調査研究をも実施している。

伊治城跡の調査は、多賀城跡調査研究指導委員会で承認された昭和49年度を初年度とする多賀城関連遺跡調査第1次5か年計画の第3年次～第5年次の調査に組みこまれている。3か年にわたる調査の実績は次表に示すとおりである。

第1表 伊治城跡調査実績表

年次	調査内容	発掘面積	調査期間	総経費
51年度	1. 地形図作成(航空測量)			千円
	2. 現地踏査・研究史整理			1,500
52年度	1. 北辺外郭線発掘調査	168 m ²	7月4日～8月3日	3,000
	2. 中央平坦部地区発掘調査(第1次調査)	270		
53年度	1. 中央平坦部地区発掘調査	780	7月3日～8月4日 11月11日～11月13日	3,000
	2. 西辺外郭線地区電気探査(第2次調査)			

昭和51年度は、伊治城跡に関する研究史の整理、アジア航測株式会社への委託による縮尺1/1000の地形図作成、遺跡の踏査、照明寺に保管されている本遺跡出土遺物の調査などおもに問題点の検討と遺跡の地形や遺物の散布状況を把握する作業を行った。

昭和52年度は前年度の成果をもとに大堀地区と唐崎地区の2地点を対象とし、本遺跡としては、はじめての発掘調査(第1次調査)を実施した。その結果、大堀地区では台地の北斜面において東西に延びる土塁とその内側に掘られた大溝が検出され、これらは古代の構築で本遺跡の北辺を画する外郭施設であることが明らかにされた。また唐崎地区では保存良好な竪穴住居跡が1軒検出され、その床面から出土した「城厨」の墨書きもつ須恵器杯からこの地が古代に「……城」と呼ばれ、内部に「厨」を備えていたらしいことが推測された。出土遺物では、須恵器が圧倒的に多く(墨書き器6点を含む)、土師器は比較的小ない。そしてこれらの年代は、ほぼ8C後半から9C前半頃のものとみられた。その他住居跡内からは鐵鏟・刀子・鉋などの鉄製品が多量に発見された。以上のような第1次調査の成果により、本遺跡が伊治城跡であることはほぼ妥当であると考えられるに至り、今後の問題点として政庁的な性格をもつ地域や官衙ブロックなどの郭内構造の把握や、外郭線の追求などがあげられた。第1次調査の成果についてはすでに、『伊治城跡I—昭和52年度発掘調査報告』(多賀城関連遺跡発掘調査報告第3冊・1978・宮城県多賀城跡調査研



第1図 伊治城跡位置図

- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 1 伊治城跡 | 2 鳥矢先古墳群 | 3 大沢横穴古墳群 |
| 4 緋塙横穴古墳群 | 5 佐野遺跡 | 6 長者原遺跡 |
| 7 小館山横穴古墳群 | 8 佐内屋敷遺跡 | 9 山の上遺跡 |
| 10 利駒堂遺跡 | 11 猪塚遺跡 | 12 狐塚室跡 |

究所)として刊行している。

今年度の調査(第2次調査)は第1次5か年計画の最終年次の事業にあたり、総経費300万円の予算(うち国庫補助2分の1)を得て、政府的な官衙ブロックの把握と西辺の外郭線探査を主な目的として前記の要領で実施した。

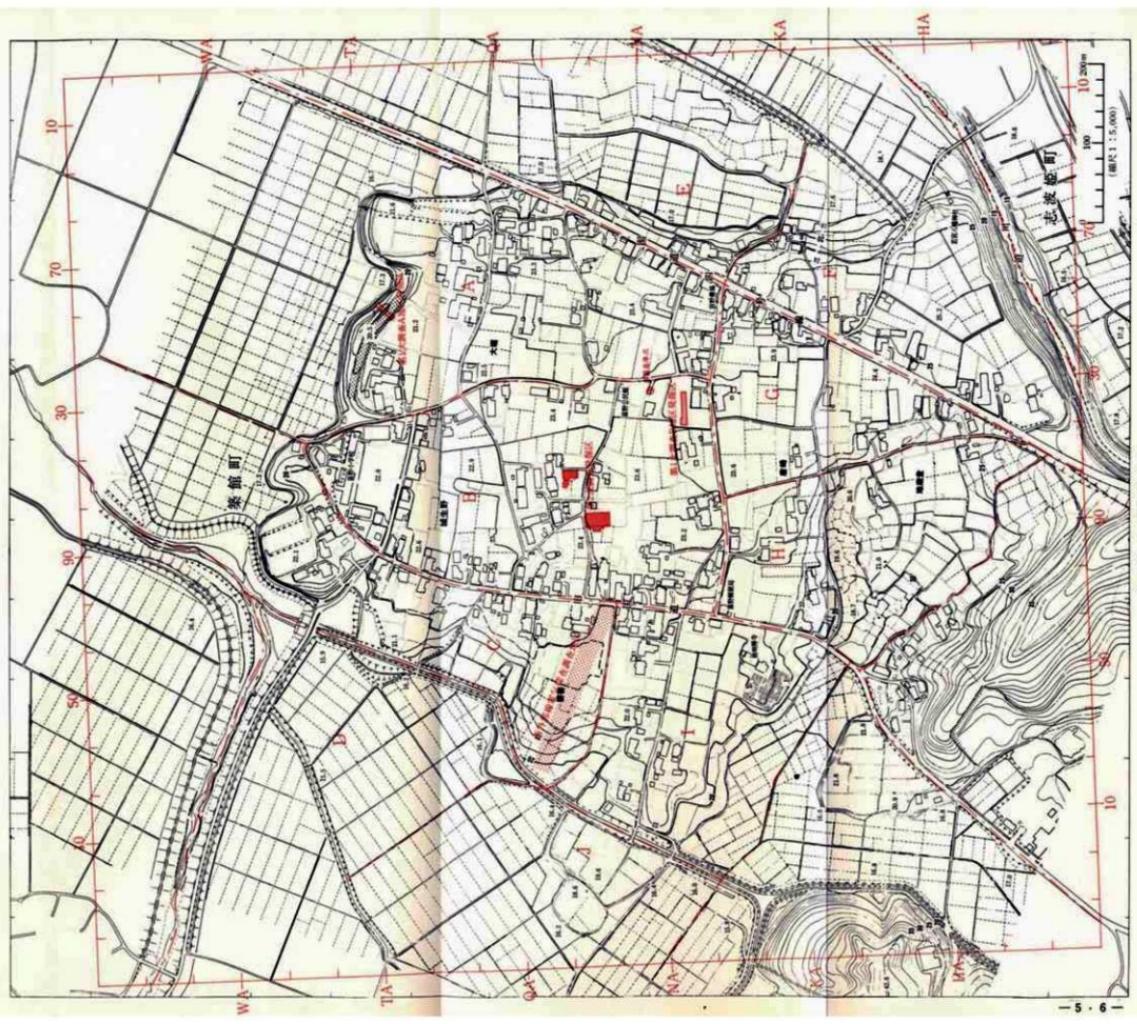
III 遺跡の立地と調査の経過

伊治城は律令国家が陸奥国の山道地方を統治するために、神護景雲元(767)年に設置した古代城・である。その擬定地は宮城県栗原郡築館町城生野に所在する。この地域は宮城県の北部、多賀城の北約52kmに位置し、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間にあたっている。遺跡は、一迫川と二迫川にはさまれ、北を二迫川、東を一迫川、西と南を小さな谷によって区画されたほぼ方形の地形をなす河岸段丘上に立地している。この段丘は、東西約700m、南北約650mほどの広さをもち、周囲の水田面との比高はおよそ6mほどある。段丘の中央部はほぼ平坦で、火山灰が厚く堆積しており、独立した台地状をなしている。現在台地の北斜面には長さ150mほどの東西にはしる土星状の高まりと空堀がみられる。これらは第1次調査の結果、古代の土壙と大溝であることが判明している。台地上にはほぼ全面にわたって土師器や須恵器の散布がみられる。中でも、台地の中央部から南半部にあたる唐崎地区や要害地区に比較的濃密な分布が認められ、これらの地区ではこれまでの開田工事などでも多量の遺物が採集され、瓦も出土している。

今回の調査の主な目的は、台地中央部における遺構のあり方を解明することにあった。すなわち、他の城・遺跡にみられるような政府的な官衙ブロックが本遺跡にも存在するのかどうかの手がかりを得ることである。遺跡地形図や明治年間に作成された地籍図などを検討した結果、台地中央部にややまとまりのある方形の地割が認められたので、この地区を調査対象とすることにした(第2図)。発掘調査はこの地区を東西にはしる町道をはさむ畠地2地点を選定して行った。両調査区はいずれも本移籍中地区割のB地区にあたる(D I J B)が、小字は町道の南側が唐崎、北側が大堀になるため、調査では便宜上唐崎地区に設定した調査区を西地区、大堀地区のものを東地区と呼ぶことにした(第3図)。地主は西地区が千葉三郎氏、東地区が佐藤敏夫氏である。幸い両氏より土地借用について快諾を得ることができたので7月3日から調査に着手した。

まず、調査予定地の除草と本遺跡発掘基準点からの原点移動を行い(7月3日)、鍵入式の後、ただちに発掘基準線から割出した調査区を設定し、西地区から発掘に取りかかった

第2図 伊治城跡地形図

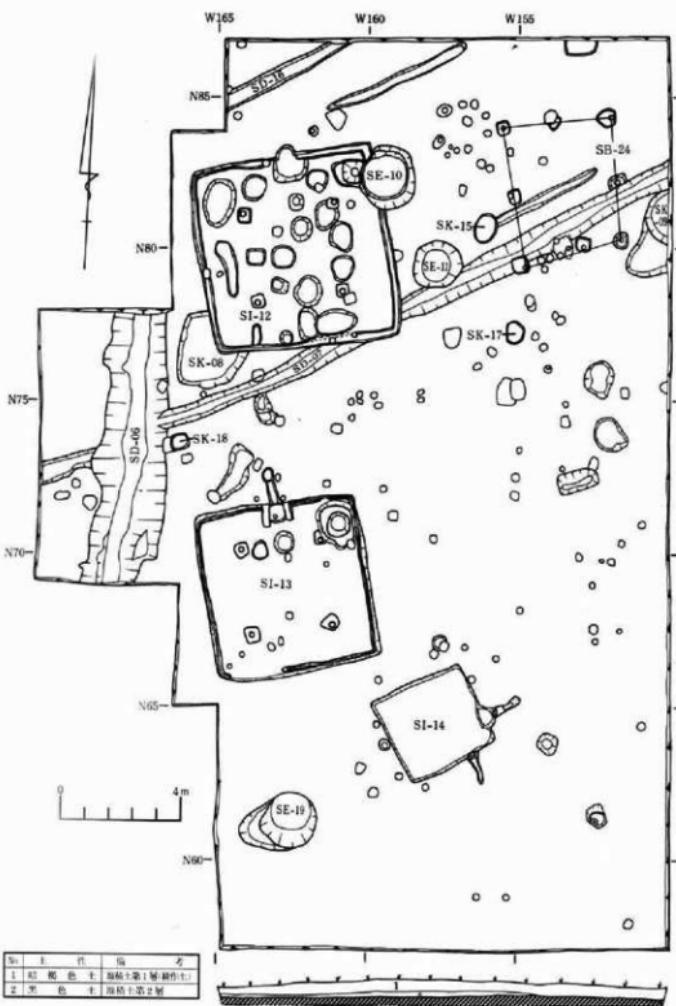




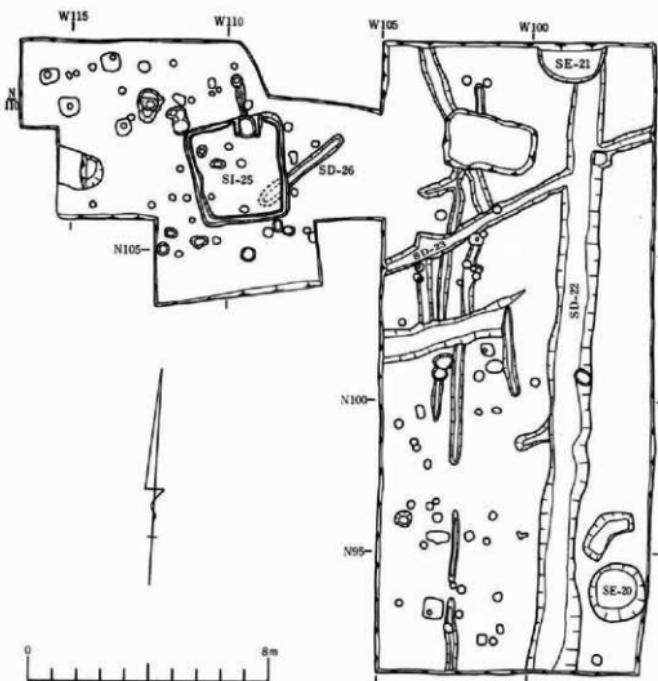
第3図 第2次調査発掘区

(7月4日)。第1層(耕作土)を除去したところ、第2層上面で土・(SK08)と井戸(S E09)が検出されたが、この第2層自体が耕作によって著しく搅乱されており、遺構の明確な確認は困難であった。そこで第2層を掘り下げた結果、地山面において発掘基準線に沿って南北にのびる溝(S D06)とこれによって切られている南西～北東方向に延びる溝(S D07)が検出された(7月7日)。地山面での遺構検出作業を更に続けたところ、調査区の北西部・西部・中央南部でそれぞれ1軒づつ計3軒の堅穴住居跡(S I 12～14)が検出されたほか、新たに土・3(SK15・17・18)、溝1(S D16)、井戸3(SE10・11・19)およびピット多数が発見された。ピット群については形・大きさ・柱痕跡・配置関係などを検討した結果、調査区北東部で掘立柱建物跡1棟(S B24)が確認できた(7月13日)。重複関係は、S I 12→S D07・S D08・S E10、S D07→S D06・S E09・S E11、S B24→S D07のように認められ、いずれの場合も後者が新しい。その後各遺構の堆積土を順次掘り下げ、遺構精査を行った。堅穴住居跡は方形プランで、粘土で築かれたカマドを備えており、いずれも第1次調査で検出したSI04住居跡とほぼ同じ構造をもっていた。S I 12・S I 13からは多量の土師器・須恵器が出土したが、これらでは、杯形土器において非ロクロ調整のものとロクロ調整のものの両者を含む土師器群と、ヘラ切り無調整のものを主体とし、底部全面ヘラケズリされているものや糸切りのものを若干含む須恵器群との共伴がみられ注目された。SK18は小規模な土・であるが、比較的多量の土器が出土しており一種の土器溜め的なものかと思われる。またSK08からは染付磁器、SE19からは擂鉢片が出土し、これらは中世以降のものであることがわかった。他にSD06、SK09、SK15、SK17、SD22から少量の土師器・須恵器が出土した。他の遺構からは遺物は全く出土していない。なお、SE09、SE10、SE11は、途中で湧水が激しくなり側壁も脆弱だったため完掘はできなかつた。その後住居跡については堆積土の断面図を作成し、セクションベルトを取りはずした(7月21日)。

東地区は西地区の精査と併行して調査を行つた。まず調査区を設定し(7月13日)、第1層(耕作土)を除去したところ、調査区北端で井戸(S E21)が検出された。この井戸は近年まで佐藤氏宅で使用していたものだったので、第2層を掘り下げ調査を進めた。その結果、調査区北西端の地山面で堅穴住居跡1軒(S I 25)を検出した。その他、地山面で検出した主な遺構には溝3(S D22・23・26)、井戸2(SE20・21)などがある。重複関係は、S D23→S D22→S E21、S D26→S I 25などが認められた(7月24日)。各遺構の精査を行つた結果、S I 25住居跡は形態・出土遺物ともに西地区で検出した住居跡と近似するものであることが明らかになつた。またSE20およびSD22堆積土からは染付磁器が出土し、SE21とともに近世以降のものであることがわかつた。



第4図 西地区調査区遺構全体図



第5図 東地区調査区遺構全体図

両地区の精査が終了した段階で調査区全体および各遺構の写真撮影を行い、実測のための造り方を設定して平面図を作成し、レベルを記入した(7月28日)。平面図終了後、各住跡については床面下の補足調査を行い、構築方法を検討した。どの住跡も床面の全面ないし一部に貼床がみられた。

以上のような調査経過から、この地域は本住跡の中で堅穴住居が建てられていた一画であり、当初目的とした官衙的な建物などが配置されていた区域ではなかったことが判明した。8月4日には埋戻し作業を終え、発掘器材を撤収して一切の調査を終了した。

なお調査途中の7月25日には現地説明会を開催し、調査成果を一般および報道関係者に

公開した。

西外郭線の電気探査は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの西村康・岩本圭輔両氏をむかえて 11 月 11 日～13 日の 4 日間にわたって実施した。その結果については第VII章で述べる。

IV 発見された遺構と遺物

調査地区は本遺跡のほぼ中央にあたり（第2図）、中地区割のB地区に含まれる。発掘地点は西地区・東地区ともにほぼ同レベルの平坦面で、現状は畠地となっている（第3図）。発掘面積は西地区が 519 m²、東地区が 261 m²である。調査の結果、西地区では竪穴住居跡3、掘立柱建物跡1、土・4、井戸4、溝2など（第4図）が、東地区では竪穴住居跡1、井戸2、溝3など（第5図）が検出された。両地区とも表土から地山面までの深さは約 60 cmほどである。遺構の分布にはとくに顕著な傾向は認められなかった。以下遺構の種類ごとに詳述してゆきたい。

なお遺物については出土傾向のみ本文で触れ、詳細は表および実測図で示した。土器の分類基準については記述が前後するが、第V章で述べる。

1. 竪穴住居跡

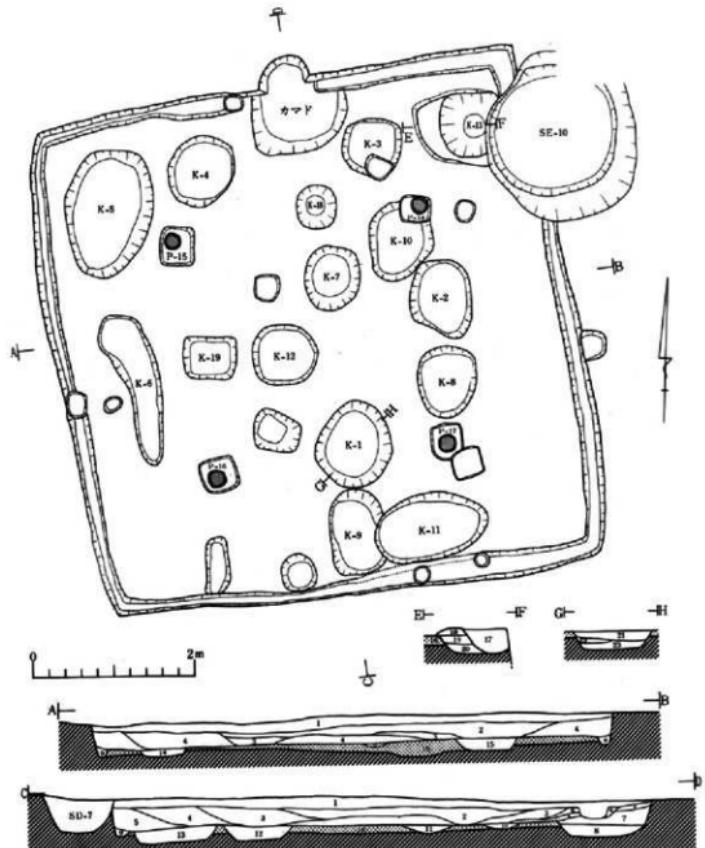
（1）S I 12住居跡

西地区北西部の地山面で確認した住居跡である（第6図）。壁は比較的遺存状況が良好であるが、カマドや煙道は失われている。

〔重複〕 S D07・S K08・S E10 との重複がみられ、本住居はこれらに切られており最も古い。

〔平面形・規模〕 ほぼ正方形をなし、東西約 6.4m、南北約 6.3m である。各隅はほぼ直角である。方位は東辺で N13° W である。

〔堆積土〕 5 層認められる。第1層は柔かい暗茶褐色土層で、最大で約 15 cm ほどの厚さをもち、住居跡のはば全面を覆っている。第2層は地山の細かいブロックを含むやや堅い茶褐色土層で、最大で約 10 cm の厚さをもち、住居跡の中央部分に堆積している。第3層は地山のブロックを多量に含むやや堅い黒褐色土層で、最大で約 20 cm ほどの厚さをもち、住居跡中央部の床面上にドーナツ状に堆積している。第4層は明るい黄褐色土で、最大で約 25 cm ほどの厚さをもち、住居跡壁周辺と中央部の床面上に堆積している。第5層は黒灰色土



No	土性	備考	No	土性	備考	No	土性	備考
1	暗茶褐色土	住居跡堆積土第1層	9	黄褐色土	周溝埋土	17	黒褐色土	大便抜き穴堆積土
2	茶褐色土	住居跡堆積土第2層	10	燒土	K-18埋土	18	黄褐色粘土	手狀にまわした粘土
3	黒褐色土	住居跡堆積土第3層	11	燒土	K-7埋土	19	褐色土	斜穴埋土
4	黄褐色土	住居跡堆積土第4層	12	燒土	K-1埋土	20	黄褐色土	斜穴埋土
5	黒灰色土	住居跡堆積土第5層	13	黒褐色土	K-9埋土	21	燒土	K-1埋土①
6	燒土	カマド内堆積土①	14	黒褐色土	K-6埋土	22	暗褐色土	K-1埋土②
7	黒褐色土	カマド内堆積土②	15	燒土	K-2埋土	23	褐色土	K-1埋土③
8	灰白色土	カマド脇方理土	16	暗褐色土	粘土			

第6図 S.I. 12住居跡

で、南壁および西壁の壁際に部分的に堆積している。以上の堆積土は土性や堆積状況などからみていずれも住居廃絶後に自然堆積したものとみられる。

【壁】地山を掘りこんで壁としている。壁の立ち上がりはやや急である。遺存状況は比較的良好で、最も保存の良い西壁中央部で約 36 cm の高さをもつ。南壁の一部は S D 06 溝によって壊されている。

【床面】全面に厚さ 10~15 cm ほどの暗黄褐色土によるやや堅い貼床がみられる。床面および掘り方の底面はほぼ平坦である。

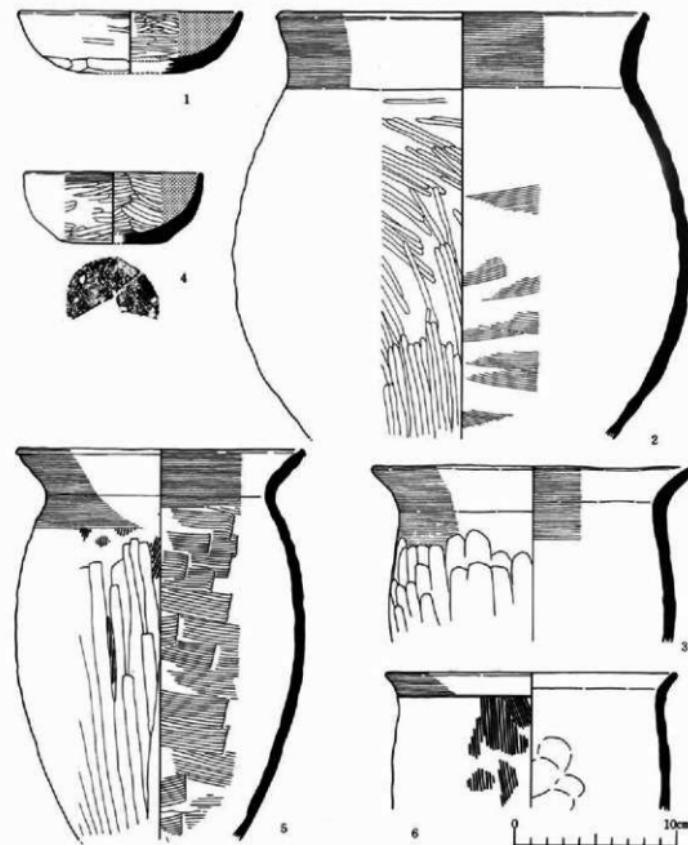
【周溝】カマド部分を除き全周している。カマド部分では両端が立ち上がっている。幅約 18 cm、深さ約 10 cm で断面形は U 字形をなす。堆積土は一手で、住居跡堆積土との関係からみてこの周溝は住居廃絶時にはすでに埋まり切っていたものとみられる。周溝の埋め土を切って計 4 個のピットが検出されたが、配置などにはとくに規則性は認められなかつた。

【主柱】柱穴、柱痕跡、埋土および配置関係などから、対角線上に並ぶピット 14~17 が主柱穴とみられる。柱穴は一辺約 45 cm の方形、柱痕跡は径約 20 cm の円形で、貼床上面からの深さは 17~24 cm ほどある。柱間隔はピット 16・ピット 17 間が 2.9 m、他は 3 m である。

【カマド】北壁中央部に付設されている。本体は完全に壊されており、わずかに燃焼部奥壁を検出したのみである。付近には焼土の散布がみられた。残存部の状況からみて本体の一部が壁外にはり出し、奥壁の上部に煙道がとりつく形態のカマドとみられる。カマド本体および構築粘土などが全くみられないことから、本カマドは住居廃絶に際して意図的に取り壊されたものと考えられる。煙道部は後後に削平されたのであろう。

【須恵器大甕据え穴】住居跡北東隅で周囲に土手状に粘土を盛り上げた径約 80 cm の円形の土・が検出された (K-13)。土・底面は丸味をもつている。遺構の状態からみて第 1 次調査の S I 04 住居跡にみられたような須恵器大甕の据え穴であろう。据えつけ方法をみると①貼床上から長径 100 cm、短径 90 cm ほどの楕円形の据え穴を掘りこむ。②大甕を据える。③据え穴と大甕の空隙を褐色土および黄褐色土で埋める。④大甕の周囲に黄褐色を土手状にめぐらし固定する、といった手順を認めることができる。これは S I 04 住居跡と全く同一の手順である。

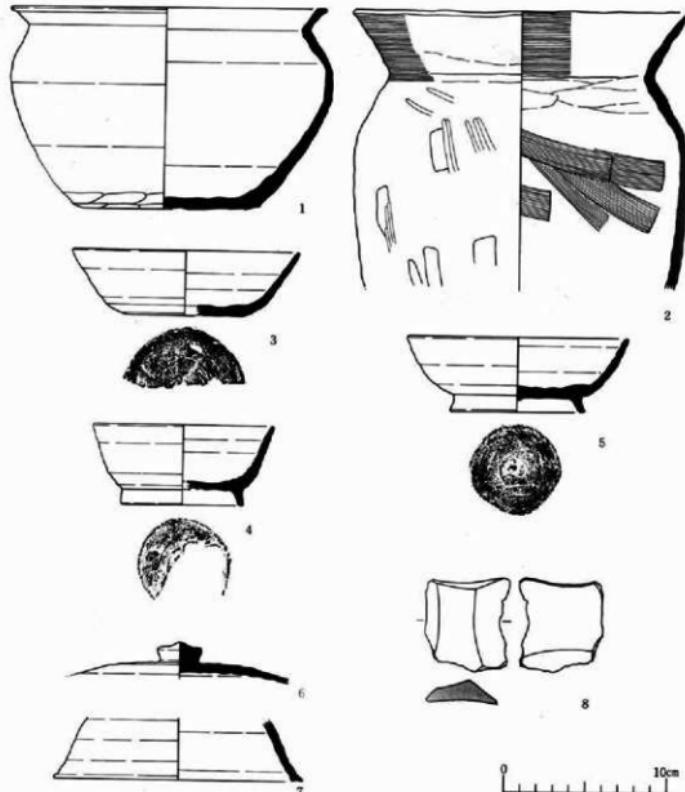
【土・群】住居床面で計 14 個の円形ないし楕円形の土・が検出された。これらは 80~190 cm ほどと比較的規模が大きく、深さは 15~20 cm にほぼ一定しており、いずれも貼床上面から掘りこまれ、底面は地山に達している。規模や柱痕跡がないことなどから他の柱穴やピットとは区別できる。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかで、全体が皿状に窪むものが多い。これらは平面形や住居内における位置および埋土のちがいにより次の 2 つのグループに分けることができる。A：床面中央部に位置する円形に近い土・で、多量の焼土や木炭が充



土器器観察表

番号	種類	断面	地区・層位	内部内面	外部外面	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	土器底	鉢	0003・1-12・R-15	ヒガリ	ハラカスリ(火照)	ヒガリ・黒色地質		I F 1a	R-008
2	土器底	鉢	0003・1-12・R-4	タコナギ→1.万ケ		ナデハコナゲ	脚部横円形	I F 2a	008
3	土器底	鉢	0003・1-12・R-10	タコナギ		ナデハコナゲ	底部を灰く	I E 3a	009
4	土器底	鉢	0003・1-12・R-10	タコナギ→1.万ケ	ヒガリ(半鏡)	ヒガリ・黒色地質		I G 3a	005
5	土器底	鉢	0003・1-12・R-10	タコナギ→コロナゲカヌリ	ハラカスリコナゲ	底部を灰く		I F 3a	007
6	土器底	鉢	0003・1-12・R-10	ハラカスリコナゲ		ハラカスリコナゲ		I D 3a	009

第7図 S.I. 12住居跡出土遺物(1)・縁部・床面



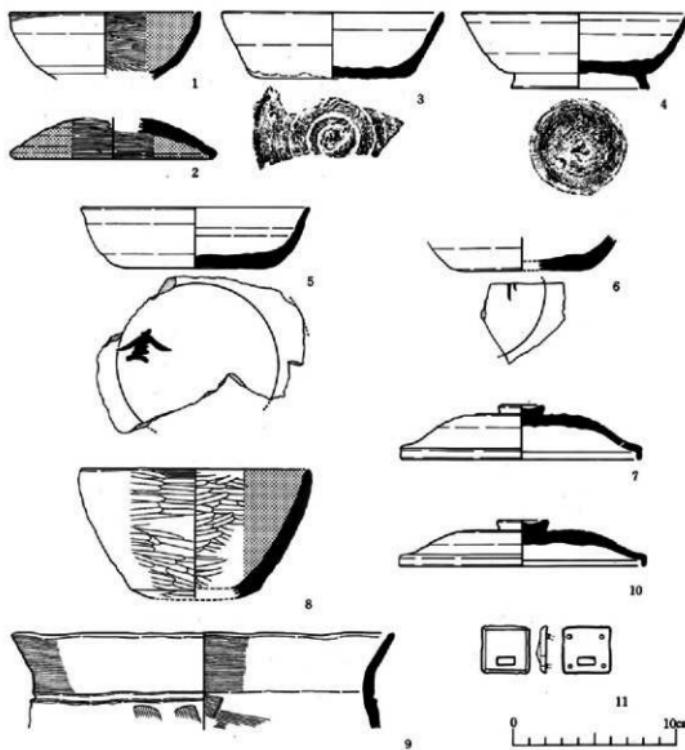
土器観察表

番号	種類	断面	底X・縁口	体部外側	底面外側	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	直形器	盤	0000-1-12+底面	クロコナフ	手縫もタズリ	ロクロナフ	縫合施色。底は光沢	Ⅲ 36	007
2	直形器	盤	0000-1-12+4周	クロコナフスリ→1.2角		ロクロナフ	縫合を大きく。	Ⅰ E 36	005
3	直形器	盤	0000-1-12+4周	クロコナフ	凹縫ハラクヌリ	ロクロナフ		IV 36	003
4	直形器	高脚盤	0000-1-12+4周	クロコナフ	ヘラ切下→高台	ロクロナフ		IV 36	004
5	直形器	高脚盤	0000-1-12+4周	クロコナフ	ヘラ切下→高台	ロクロナフ		V 36	006
6	直形器	高脚盤	0000-1-12+4周	クロコナフ→縫合スリ		ロクロナフ	口縫合なし。天井面には平縫。	I 36	005
7	直形器	盤	0000-1-12+4周	クロコナフ→縫合スリ		ロクロナフ	縫合のS		009

石製品観察表

番号	種類	底X・縁口	規格	和算	目(3mm)	目(6mm)	目(9mm)	その他の特徴	分類記号	登録番号
8	石斧	0000-1-12+4周	底は光沢	端火削	35	45	13	4.2mmの表面をもつ		007

第8図 S.I. 12住居出土遺物(2)・床面・堆積土第4層



土器観察表

番号	種類	耳縁	地紋・網目	外底外面	底盤外面	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	土器鉢	無	0601-1-12-1 織	ロクロナガ-4箇点カスリ	七点切欠き	口縁外面に若干のこぼれあり	Ⅱ・加	01-009	
2	土器鉢	無	0601-1-12-2 織	ロクロナガ-1箇点	ロクロナガ-1箇点	内外底面に黑色斑塊		009	
3	土器鉢	無	0601-1-12-3 織	ロクロナガ	ハラ切り無網目	底盤外面に海藻状の斑、灰白色	Ⅱ・A加	005	
4	土器鉢	無	0601-1-12-3 織	ロクロナガ	ハラ切り無網目	ロクロナガ	はげ足形	Ⅱ・加	005
5	土器鉢	無	0601-1-12-2 織	ロクロナガ	ハラ切り無網目	ロクロナガ	底盤外面に「金」の墨書きあり	Ⅱ・A加	001
6	土器鉢	無	0601-1-12-2 織	ロクロナガ	ナギ	ロクロナガ	底盤外面に墨書きあり(判読不能)	Ⅱ・加	002
7	土器鉢	無	0601-1-12-2 織	ロクロナガ-4箇点カスリ	ナギ	ロクロナガ	2箇点から底盤裏面	Ⅱ・加	010
8	土器鉢	無	0601-1-12-1 織	ロクロナガ-1箇点	七点切	七点切欠き		Ⅱ・加	003
9	土器鉢	無	0601-1-12-1 織	ロクロナガ-1箇点	ロクロナガ-1箇点	ロクロナガ-1箇点	底盤に一筋の成線がめぐる。脚部以下を欠く	Ⅰ・D加	008
10	土器鉢	無	0601-1-12-1 織	ロクロナガ-4箇点カスリ	ロクロナガ	ロクロナガ		Ⅱ・加	001

鉄製品観察表

番号	種類	地紋・網目	耳縁	底盤	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	その他の特徴	分類記号	登録番号
日	消費金具(刃付)	0601-1-12-1 織	18切欠	29	29	3.5		中央子半に刃付の跡なし。底盤下間に新鋸跡有り(削)		010

第 9図 S.I. 12住居跡出土遺物 (3) - 堆積土第 1~3層

満しているもの（K-1～4・7・8・10・12・18・19）、B：面の周縁部に位置する細長い楕円形の土・で、黒褐色土が充满し焼土や木炭をほとんど含まないもの（K-5・6・9・11）。両者ともに埋土が住居全体の堆積土とは異なるため、住居廃絶時にはすでに埋まり切っていたものと考えられる。

【その他の施設】床面から8個のピットが検出されている。これらのピットには柱痕跡が認められず、ピットの形、堆積土、配置関係などにもとくに規則性は認められなかった。また、貼床下の地山面において土・1個、ピット2個が検出された。

【遺物】堆積土1～5層、床面および貼床や土・など住居跡細部から遺物が出土している（第2表・第7～9図）。床面・細部：土師器には杯と甕があり、すべて非クロロ調整（I類）のものである。甕の底部には木葉痕のみられるものも1点含まれている。須恵器には杯と甕があるが、いずれも小破片で細かな特徴は知り得ない。その他、細部から丸瓦の破片が8点出土している（図版12）。これらは粘土組巻上げ成形で、凹面に布目痕を残し、凸面は平行タタキの後にナデ調整されている。玉縁付きのものも1点ある。堆積土：第1～4層からは比較的多量の遺物が出土した。この中で注目される点を若干述べる。土師器杯・椀では第1層と第4層において非クロロ調整のもの（I類）とクロロ調整のもの（II類）の両者がみられ、これに共存する甕はすべてI類のもの（底部木葉痕のもの2点を含む）で占められている。第3層では杯II類、甕I類がみられるほか、内外面ともヘラミガキ・黒色処理した蓋1点（第9図2）が出土した。また、須恵器杯は第4層でヘラ切り無調整のもの（II A類）、体部下端～底部全面に手持ちヘラケズリが施されているもの（IV・類）、同じく回転ヘラケズリが施されているもの（IV・類）が、第3層でII A類と回転糸切り後

第2表 S I 12住居跡出土遺物一覧

層位 遺物	1層	2層	3層	4層	5層	床面	細部
土 師 器	杯 〔I (2)・II (2)〕 4	(II (1)) 1	〔II (1)〕 1	IIA (1) 2		IG (1) 1	IF (1) 1
	椀 IB (1) 1			〔I (1)〕 1	〔I (1)〕 1		
	蓋		(内外国色) 1				
	甕 ID (1) 〔I (18)〕 19	〔I (6)〕 6	〔I (7)〕 7	IF (2) 〔I (17)〕 19		ID (1)・IE (1) 〔I (28)〕 30	IE (1)・IF (2) 〔I (2)〕 5
須 恵 器	杯 III A (1) 5	II A (1)・IV - (1) 3	IIA (2)・III - (1) 3	IIA (1)・IV - (1) IV - (1) 6			2
	高台杯	VII (1) 1	VII (1) 1	IV (1)・VII (1) 2			
	蓋 III (1) 2	III (1) 1		I (1)・III (1) 3			
	甕 1	2		3		III (1) 1	
瓦	5	1		2			8
その他	方形鉄製品 (1)			砾石 (1)・礫 (1)			

〔 〕は途中までの類型がわかるもの、() は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数

体部下端～底部に回転ヘラケズリが施されているもの（II・類）が、第2層ではII A類と底部全面にナデ調整が施されているもの（IV・類）との共存がみられる。須恵器杯には底部外面に墨書のあるものが2点みられる（第9図5・6）。5は「金」と読み取れるが、6は墨痕が部分的で判読できない。土器以外では第4層から円面硯の脚部かと思われるもの（第8図7）や砥石（第8図8）が出土したほか、第1、2、4層から細部出土のものと同じ特徴をもつ丸瓦の破片が少量出土している。また、第1層からは方形の鉄製品が1点出土している（第9図11）。これは一辺約2.9cmの正方形で、断面は台形をなし、厚さは0.35cmほどのものである。中央下半には縦0.5cm、横1.1cmの長方形の透し孔がみられ、裏面には四隅に銛脚がついている。鉄製の鈔帶金具の例は今のところ知られておらず、若干疑問もあるが、透し孔や銛脚をもつ点から巡方かとも考えられる。

（2）S I 13住居跡

西地区中央部やや西寄りの地山面で確認した住居跡である（第10図）。S I 12住居跡の南側に位置し、両者は最短部で約4mほど離れている。全体として遺存状況はきわめて良好である。

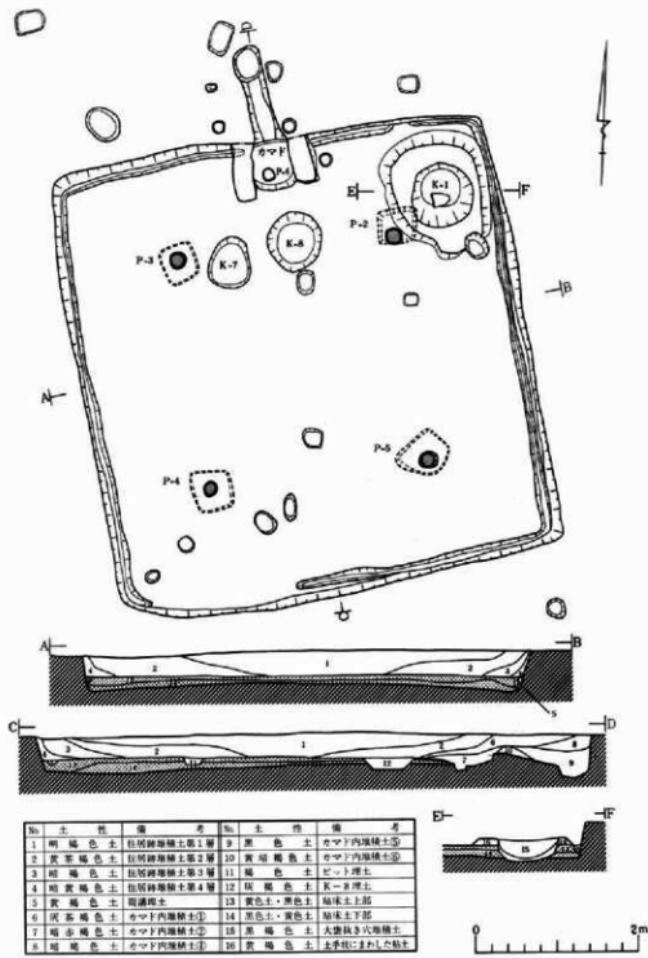
【重複】認められない。

【平面形・規模】ほぼ正方形をなし、東西約5.6m、南北約5.8mである。各隅はおおむね直角である。方位は東辺でN11°Wである。

【堆積土】4層認められる。第1層は若干黒色土を混じえる柔かい明褐色土層で、約30cmの厚さをもち、住居跡中央部に堆積している。第2層は地山ブロックを含む柔かい黄茶褐色土層で、最大で約25cmの厚さをもち、床面の周縁部に堆積している。第3層はやや堅い暗褐色土層で、最大で約20cmの厚さをもち、壁周辺部に部分的に堆積している。第4層は地山のブロックを多量に含む柔かい暗黄褐色土で、壁際にのみ堆積している。以上の堆積土は土性や堆積状況などからみて、いずれも住居廃絶後に自然堆積したものとみられる。

【壁】地山を掘りこんで壁としている。壁の立ち上がりは比較的急である。遺存状況はきわめて良好で、最も保存の良い東辺中央部で約35cmほどの高さをもつ。

【床面】床面は以下のとおりの手順でととのえられている。すなわちまず掘り方の底面に約10cmほどの厚さで、黄色土と黒色土を互層におき、その上面（a面）を堅くたたきしめている。さらにこの上に約8cmほどの厚さで、黄色土と黒色土を互層におき、堅くたたきしめ、その上面を床面としている。つまり床面下は大きくみて、二度の仕事がなされている。これは床面の重複のようにも見うけられるが、両者の間には木炭や焼土・よごれ土などの堆積がまったくみなれないことから、これは床面をととのえる際の工程を示している



第 10 図 S I 13 住居跡

と理解される。床面およびa面はほぼ平坦であるが、掘り方の底面は凸凹がはげしく、とくに住居南半では壁際がやや深くなっている。

【周溝】カマド部分を除き全周している。カマド部分では周溝の末端部が一部カマド本体の下にもぐりこんでおり、周溝が掘りこまれた後にカマドが構築されたものと考えられる。幅は10cm前後で比較的狭く、深さは約10cmで断面形はV字形をなす。壁材痕跡などは検出されなかった。カマドや住居跡堆積土などとの関係からみて、この周溝は住居廃絶時にはすでに埋まり切っていたものとみられる。

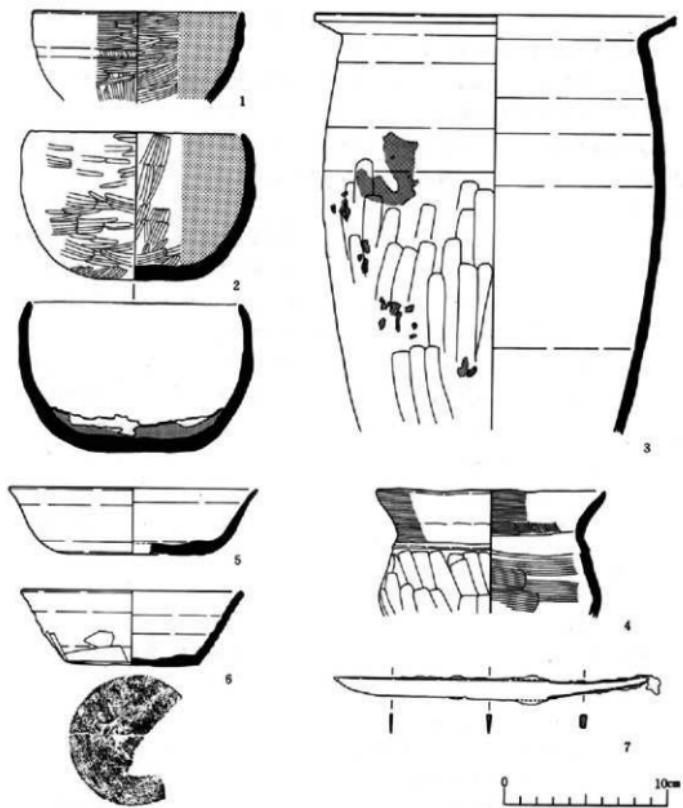
【支柱】柱穴、柱痕跡、埋土などの類似および配置関係などからみて、住居跡の対角線上に並ぶピット2～ピット5が主柱穴とみられる。柱穴はa面で検出され40×50cmほどの長方形である。柱痕跡は床面で検出され、径約20cmほどの円形をなし、床面からの深さは約50cm前後にはほぼ一定している。柱間隔は約2.7mほどでほぼ等間隔である。

【カマド】北壁中央部に付設されている。床面上に灰白色の粘土で築いており、河原石や土器などによる補強はみられない。内部の広さは幅約50cm、奥行約55cmで、中央部が若干皿状に窪んでいる。内面側壁は火熱で赤く焼けている。天井部はすでに崩れ落ち、その崩壊土とみられるスサ入りの焼粘土がカマド内に厚く堆積していた。燃焼部奥壁はいくぶん立ち上がり、その上部に煙道がとり付いている。煙道は幅約30cm、長さ約120cmの溝状をなし、底面は先端に向かってやや大きく傾斜している。末端部には径約35cm、深さ約50cmほどの煙出し孔がついている。燃焼部床面からは径15cm、深さ8cmほどの小さなピットが検出された(P-6)。支脚の抜き取り穴かも知れない。

【須恵器大甕据え穴】住居跡北西隅で周囲に土手状に粘土を盛り上げた径75cmほどのほぼ円形の土・が検出された(K-1)。粘土上面からの深さは約30cmで、底面は丸味をもっている。遺構の状態はS104、S112住居跡のものときわめて類似しているところから須恵器大甕の据え穴であろう。堆積土内からは須恵器大甕の破片が2点、刀子が1点出土したが甕破片2点は別個体の破片であり、本来この穴に据えられていたものではなく、大甕が抜き取られた後に落ちこんだものと考えられる。

【土・】カマド前面の床面でやや不整円形の土・が2個検出された(K-7、K-8)。大きさは径50～65cm、深さは18～24cmほどで、堆積土中にはK-7では多量の木炭、K-8では灰白色土を含む。いずれも底面は平坦である。堆積土の観察から、これらは住居廃絶時にはすでに埋まり切っていたものとみられる。

【その他の施設】床面上で計8個のピットが検出されている。形態や配列にとくに規則性はみられない。また、掘り方底面で、不整形の土括が2個検出された。住居構築以前のものであろう。



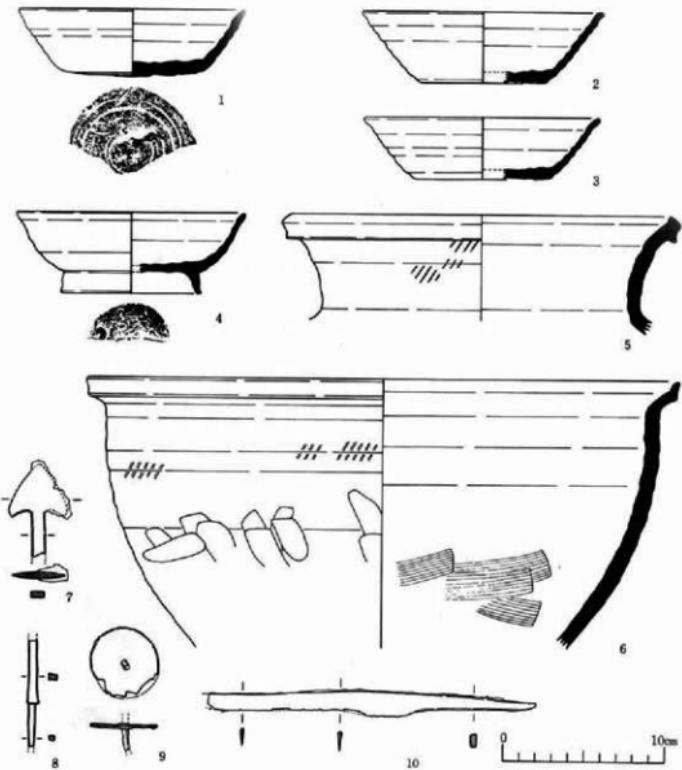
土器観察表

番号	種類	品種	地区・期代	体部外壁	底部外壁	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	土器器	瓶	0001-1-13-4-1	ナード・テクスチャ	土手型・熱帯的形	口縁部に削り目、内面は一般陶化。底盤を大きく。	I・瓶	R-961	
2	土器器	瓶	0001-1-13-4-1①	ニ槽型	土手型・熱帯的形	底盤上半に削り目、擦痕有り。	I・P・瓶	042	
3	土器器	甕	0001-1-13-4-1②	ロクロナラ→ケヌリ	ロクロナラ	体部外壁にうすく底盤毛はりついている。底盤を大きく。	II・A・甕	010	
4	土器器	甕	0001-1-13-4-1③	ロクロナラ→ケヌリ	ロクロナラ	底盤を大きく、底盤に削り跡をもつ。	II・D・甕	011	
5	泥瓦器	瓶	0001-1-13-4-1④	ロクロナラ	ロクロナラ	底盤を大きく、底盤に削り跡をもつ。	III・A・瓶	006	
6	泥瓦器	瓶	0001-1-13-4-1⑤	ロクロナラ→ケヌリ	ロクロナラ	内面底部ガラス	IV・瓶	007	

鉄製品観察表

番号	種類	地区・期代	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	その他の特徴	分類記号	登録番号
7	刀	平	先端部を丸く	190	1	1	直刃先鋒	011	

第 11 図 S1 13住居跡出土遺物 (1) - 織部



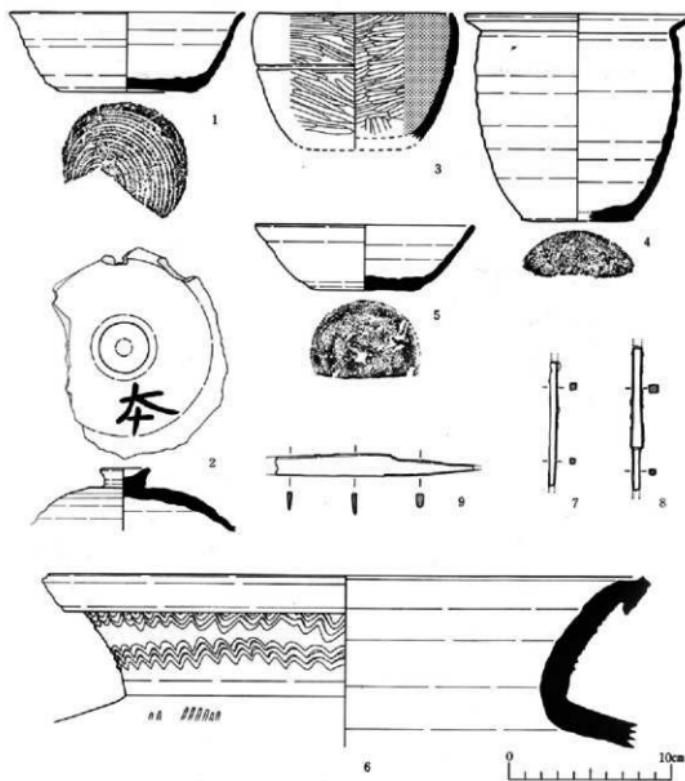
土器観察表

番号	種類	器種	地区・層段	外觀外面	直面外面	内面	その他の特徴	分類記号	登錄番号
1	陶器	杯	0001-1-12-Ⅲ-面	ロクロナマ	ハラ切り無底盤	ロクロナマ		II A類	H-001
2	陶器	杯	0001-1-12-Ⅲ-面	ロクロナマ	ハラ切り無底盤	ロクロナマ	内面火ダクキ	II A類	H-001
3	陶器	杯	0001-1-12-Ⅲ-面	ロクロナマ	ハラ切り無底盤	ロクロナマ	側壁色、底部が火燐面	II A類	H-002
4	陶器	高脚杯	0001-1-12-Ⅲ-面	ロクロナマ	ハラ切り無底盤	ロクロナマ	灰白色	II B類	H-003
5	陶器	罐	0001-1-12-Ⅲ-面	タガネ-ロクロナマ		ロクロナマ	腹部以下を丸く、	II B類	H-003
6	陶器	罐	0001-1-12-Ⅲ-面	タガネ-ロクロナマ	ロクロナマ-ヘラナマ	ロクロナマ	底盤を尖く、灰色	II B類	H-007

鉄製品観察表

番号	種類	機種	直面・側面	直面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他の特徴	分類記号	登録番号
7	鉄 鋸	0001-1-12-Ⅲ-面	直面大頭鋸	直面	1.375	30	1	頭部の最も太い部分をもつ	III	
8	鉄 鋸	0001-1-12-Ⅲ-面	直面-先端細大頭鋸	直面	1.350	7.5	1		III	
9	鉄鋸	0001-1-12-Ⅲ-面	直面-頭部大頭鋸	直面	1.375	62	1		III	
10	刀 手	0001-1-12-Ⅲ-面	直面大頭鋸	直面	1.300	13	1		III	

第 12図 S.I. 13住居跡出土遺物 (2) - 床面



土器観察表

番号	種類	器種	断面・断口	外側外面	内側外面	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	陶器	盆	0001-1-1-1層	ロクロナマ	高切り無施加	ロクロナマ		■ A層	0001
2	陶器	盆	0001-1-1-2層	ロクロナマ-底裏ケズリ	ロクロナマ		火痕外表面に「本」の墨書きあり	■ B層	001
3	陶器	盆	0001-1-1-2層	火痕	毛筆字		毛筆字-黑色処理 番面外縁に一条の沈れがめぐら	■ A層	001
4	陶器	盤	0001-1-1-2層	ロクロナマ	ロクロナマ	ロクロナマ		■ B層	001
5	陶器	盆	0001-1-1-2層	ロクロナマ	手持ちケズリ	ロクロナマ	内表面火ダメキ	■ C層	001
6	陶器	盆	0001-1-1-2層	ロクロナマ-底裏無施加	ロクロナマ		脚部以下を欠く。其脚は一回目火未	■ C層	001

鉄製品観察表

番号	種類	断面・断口	形状	長さ(cm)	幅(cm)	N.S.(cm)	その他の特徴	分類記号	登録番号
7	鉄 鋸	0001-1-1-1層	直歯火海鋸を火鋸	171	1	1			001
8	鉄 鋸	0001-1-1-2層	直歯火海鋸を火鋸	146	0	5			001
9	刀 手	0001-1-1-1層	直歯火海鋸を火鋸	1122	18	1			001

第 13図 S.I. 13住居跡出土遺物 (3) - 堆積土第 1-3層

第3表 S.I. 13住居跡出土遺物一覧

層化 遺物		1層	2層	3層	4層	床面	細部
土 師 器	杯	II・(I)[I(I)・II(2)] 7		[I(I)]	1		IF(I)・[I(I)] 2
	椀		I(A) 2				[I(I)] 1
	甕	ID(I)・IG(I)・HC(I) 〔I(67)・II(7)〕 77	IE(2)・IG(2)・IH(I) 〔I(24)・II(6)〕 35	IB(2) 〔I(4)・II(1)〕 7		IC(2) 〔I(19)・II(1)〕 23	ID(I)・HA(I) 2
須 恵 器	杯	HA(2)・HA(I) IV・(2) 22	HA(2)・IV・(1) 13		5 1	HA(2) 11	HA(I)・IV・(1) 9
	高台杯	4	5			IV(I) 1	1 1
	甕	I(I)・II(I) 2	4	III(I) 3			
	甕	1 29	11	2	II(I)・III(I) 4		1
瓦		3	1		1		
その他		縄文土器(I) 四輪(I)	鉄鏃(I)		縄文土器(I)、刀子(I) 四輪(2)、鉄鎗(1)		スサ入り焼粘土(2) 刀子(I)

〔 〕は途中までの類型がわかるもの、() は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数

〔遺物〕堆積土第1～4層、床面および住居跡細部から遺物が出土している(第3表第11図～13図)。細部 土師器をみると杯と椀はすべて非ロクロ調整のもの(I類)であるが、甕は非ロクロ調整のもの(I類)とロクロ調整のもの(II類)の両者が共存している。須恵器には杯、高台杯、甕がある。杯にはヘラ切り無調整のもの(II A類)と体部下端～底部全面に手持ちケズリが施されているもの(IV・類)とがみられる。また、カマド堆積土からは椀形に近い器形の非ロクロ調整丸底杯の内面に貼り付いた状態で「漆紙」が1点発見された(第11図2)。これは杯内部の漆の表面に付着しているもので、縦11cm、横7cmほどである。表面は漆の樹脂により硬化され、褐色を呈しており、比較的なめらかである。裏面には漆が厚くこびりついている。おそらく杯に取り分けた漆の変化を防ぐために表面を被った蓋紙として用いられたものであろう。現在のところ文字は確認されていない。床面 土師器は甕しか出土していない。やはり、I類のものとII類のものがみられ、前者が多い。須恵器には杯、高台杯、甕がある。杯はすべてII A類のもので占められている。また、刀子1(第12図10)、鉄鏃2(第12図7・8)、鉄製鋸鍤車1(第12図9)など比較的多くの鉄製品がみられたほか、丸瓦片1、縄文土器片1なども出土した。堆積土 第1・2層を中心に多量の土器が出土した。土師器では第2層においてI類の椀とI類およびII類との共存がみられ、第1層でもやはりI類とII類の土師器杯および甕とが共存している。こういった土師器に伴う須恵器をみると、II A類のものやIV類のものが多い。ただし、第1層・3層においてはこれらに回転糸切り無調整のもの(III A類)も少數含まれており注目される。なお、第3層出土の蓋には天井部外面に「本」の墨書がみられるものがある

(第13図2)。その他、4層から丸瓦片1、3層から鉄鏃(第13図7)、2層から鉄鏃(第13図8)、丸瓦片1、縄文土器1、1層から刀子1(第13図9)、丸瓦片1点が出土している。

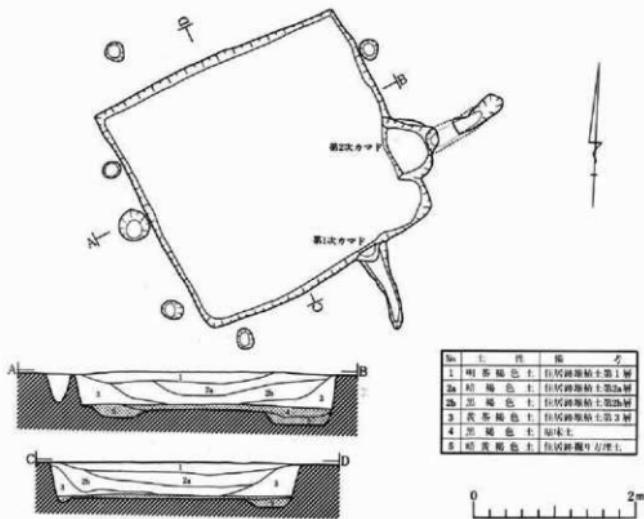
(3) S I 14住居跡

西地区中央部やや南寄りの地山面で確認した住居跡である(第14図)。S I 13住居跡の南東に位置し、両者は最も近接したところでは約1.3mほどしか離れていない。遺存状況はきわめて良好である。

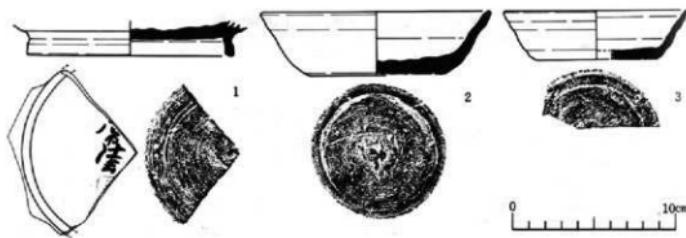
〔重複〕認められない。

〔平面形・規模〕ほぼ正方形をなし、東西約3.2m、南北約3.1mでS I 12、S I 13に較べてだいぶ小型である。各隅はほぼ直角をなす。方位は東辺でN 25° Wである。

〔堆積土〕4層認められる。第1層は柔かい明茶褐色土層で、最大で約15cmの厚さをもち、住居跡中央部に堆積している。第2a層はやや堅い暗褐色土層で、最大で約15cmの厚さをもち、住居跡中央部に堆積している。第2b層は地山のブロックを多量に含むやや堅い黒



第14図 S I 14住居跡



土器観察表

番号	種類	名稱	断面・横面	体部外表面	底面外表面	内面	その他の特徴	分類記号	分類番号
1	褐色土	高行部	0802-1-14-1断面	凹凸ケズリ一端付	ロタコナダ	前面外面上に「前庭」(括弧)の墨書きあり		B-001	
2	褐色土	井	0802-1-14-2断面	ロタコナダ	ハーフ切欠頭型	ロタコナダ	灰白色、灰白色	B-A類	001
3	褐色土	井	0802-1-14-2横	ロタコナダ	ハーフ切欠頭型	ロタコナダ		B-A類	002

第 15 図 S I 14住居跡出土遺物・床面・堆積土 第 2 番

褐色土層で、最大で約 25 cm の厚さをもち、主に住居跡中央部に堆積している。第 3 層は地山のブロックを少量含むやや柔かい黄茶褐色土層で、壁際に堆積している。以上の堆積土は土性や堆積状況などからみていずれも住居廃絶後に自然堆積したものとみられる。

【壁】地山を掘りこんで壁としており、壁の立上がりは比較的急である。遺存状況はきわめて良好で、最も保存の良い西壁で約 43 cm の高さをもつ。

【床面】床全体に厚さ 5 cm ほどの地山のブロックを多量に含む黒褐色土による貼床がみられる。貼床上面は平坦で堅くたたきしめられている。掘り形は住居中央部は平坦で浅いが、壁周辺は凹凸がはげしくて深く、全体として溝状をなしている。したがって貼床は住居中央部は掘り形底面の地山面に直接のっているが、壁周辺では掘り形の埋め土である地山のブロックを含むやや堅い暗黄褐色土の上にのっている。

【周溝】認められない。

【主柱】なし。

【カマド】新旧 2 つのカマドが検出された。古い方のカマド（第 1 次カマド）は南壁のやや東寄りで検出された。カマド本体はすでに取り壊されており、わずかに燃焼部の奥壁と煙道部を検出したのみである。燃焼部奥壁および煙道基部の床面は焼けて赤変している。煙道は基部幅約 30 cm、長さ約 90 cm の溝状をなしており、末端部にいくにしたがって幅が狭まり、浅くなっている。新しい方のカマド（第 2 次カマド）は東壁の南寄りで検出された。壁の一部をえぐり取り、側壁に灰白色粘土を貼り付けて本体を築いており、本体は完全に壁外に張り出している。内部の広さは幅約 60 cm、奥行約 45 cm で、天井部はすでに崩れ落ち、その崩壊土とみられる灰白色粘土がカマド内に堆積している。燃焼部奥壁は若干立上がり、

第4表 S I 14住居跡出土遺物一覧

遺物	層位	1 層	2 層	3 層	床面
	杯	〔I (0)〕 1			
土師器	高台杯				(内外黒色) 1
	蓋		(内外黒色) 1		
	甕	〔I (0)〕 5	〔I (0)-II (0)〕 2		〔I (0)〕 2
須恵器	杯		2 A 1	1	A 1 1
	高台杯				1
その他				繩文土器 (1)	

〔 〕は途中までの類型がわかるもの、() は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数

その上部に煙道がとり付いている。煙道は幅約 25 cm、長さ約 110 cmほどで、地山を削り抜いて掘りこんでおり、一部天井が残存しトンネル状をなしている。煙道底面は先端にいくにしたがって深くなっている。

【その他の施設】堅穴外の壁周辺から数個のピットが検出されている。これらは柱痕跡が不明で配置関係などにも特に規則性はみられないが、床面から柱穴が全く検出されていないことから、これらのピットが住居構造の一部をなしていた可能性も考えられる。

【遺物】堆積土第1~3層、床面から遺物が出土している(第4表、第15図)。遺物量は極めて少なく、全体で18点だけである。床面 土師器には内外両面をヘラミガキ・黒色処理した高台杯の底部破片と非クロロ調整(1類)の甕がみられ、須恵器にはヘラ切り無調整(II A類)の杯(2)と高台杯の底部(1)がある。須恵器高台杯は比較的底径の大きな杯部に外方にふんばつた高台が付けられたもので、高台内は回転ヘラケズリされており、「常陸口」の墨書きが認められた。堆積土 第3層からは繩文土器が1点出土した。第2層の土師器には内外両面ヘラミガキ・黒色処理した杯、I類およびII類の甕があり、須恵器にはII A類の杯(3)がみられる。第1層の土師器には杯と甕の破片がみられ、これらはいずれもI類のものである。須恵器では杯の破片が2点出土したのみである。

(4) S I 25住居跡

東地区北西部の地山面で確認した住居跡である(第16図)。西地区的S I 13住居跡の北東約60mに位置する。遺存状況は全体としてほぼ良好である。

【重複】SD26との重複がみられ、本住居跡はこれより新しい。

【平面形・規模】ほぼ正方形をなし、東西約3.2m、南北約3.4mと小型である。各隅はやや丸味をもつ。方位は東辺でN10°Wである。

【堆積土】3層認められた。第1層は柔かい黒色土層で、最大で約20cmの厚さをもち、住居跡の中央部に堆積している。第2層は地山のブロックを含む堅い暗黄褐色土層で最大で

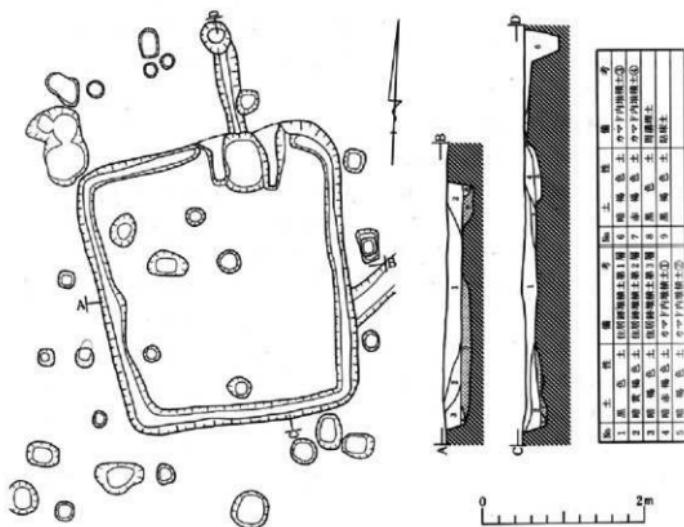
約 15 cm の厚さをもち、主に住居跡の壁際に堆積している。第 3 層は柔かい暗褐色土層で、西壁から南壁西半部にかけての壁際にのみ部分的に堆積している。以上の堆積土は土性や堆積状況などからみて、いずれも住居廃絶後に自然堆積したものとみられる。

〔壁〕地山を掘りこんで壁としており壁の立上がりは比較的緩やかである。遺存状況はやや良好で、最も保存の良い西壁で約 24 cm の高さをもつ。

〔床面〕住居跡中央部は掘り方底面をそのまま床面としているが、周辺部には厚さ 10 cm ほどの黒褐色土や黄褐色土による貼床がみられる。床面はほぼ平坦で、全体的に中央部は堅く、周辺部は比較的柔かい傾向がみられた。掘り方は中央部は平坦で浅いが、壁周辺は凸凹がはげしくて深い。

〔周溝〕カマド部分を除き全周している。幅約 20 cm、深さ約 10 cm で、断面形は U 字形をなす。壁材痕跡などは検出されなかった。住居跡堆積土などとの関係からみて、この周溝は住居跡廃絶時にはすでに埋まり切っていたものと思われる。

〔主柱〕不明



第 16 図 S.I. 25 住居跡

第5表 S.I. 25住居跡出土遺物一覧

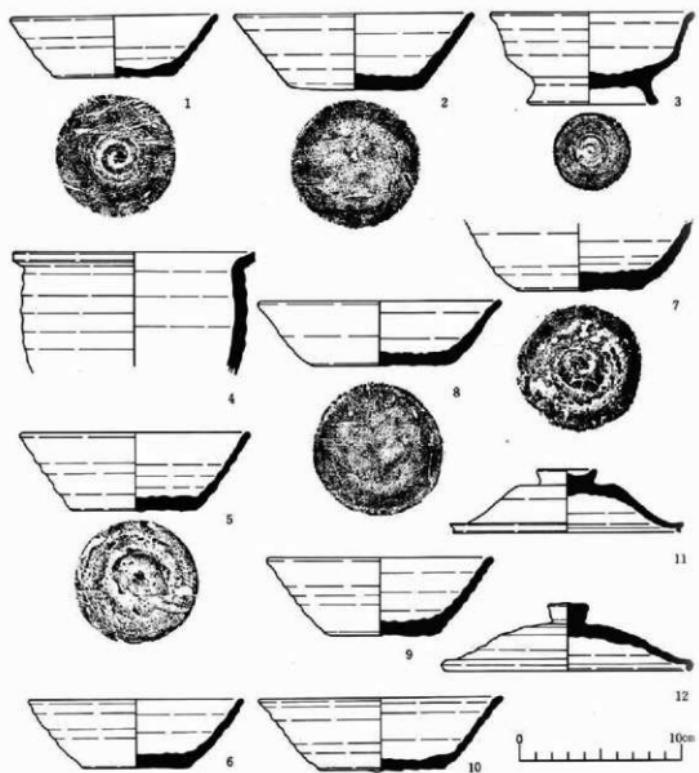
層位 遺物		1層	2層	3層	床面
土器 類	杯	I F(1)			
	甕	I D(3)・I E(2)・II B(2)・[I C2]・II G(1) 35	I D(1)・I E(1)・II A(1) II B(1)・[I D2]・II G(1) 20		I D(1) 1
須 恵 器 類	杯	II A(30)・II・(4)・IV・(1) 26	II A(7)・IV・(2) 15		II A(1)・II・(1) 2
	高台杯	IV(1) 2			III(1) 1
	蓋	1 3	1・1 4		
甕			3 1		
	甕				
蓋				4 1	3
	甕	II(1) 17			

〔 〕は途中までの類型がわかるもの、() は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数

〔カマド〕北壁のやや東寄りに付設されている。暗黄褐色の粘土で築かれており、河原石や土器などによる補強はみられない。内部の広さは幅約40cm、奥行約60cmである。天井部はすでに崩れ落ちており、その崩壊土とみられる焼粘土がカマド内に堆積している。燃焼部奥壁は若干立上がり、その上部に煙道がとり付いている。煙道は幅約30cm、長さ約140cmの溝状をなし、底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。末端部には径35cm、深さ40cmほどの煙出し孔がついている。

〔その他の施設〕床面から6個、竪穴外の壁周辺から多数のピットが検出されている。これらは柱痕跡が不明で配置関係などにもとくに規則性は認められないが、主柱穴が不明なことから、これらのピットの一部が住居構造の一部をなしていた可能性も考えられる。

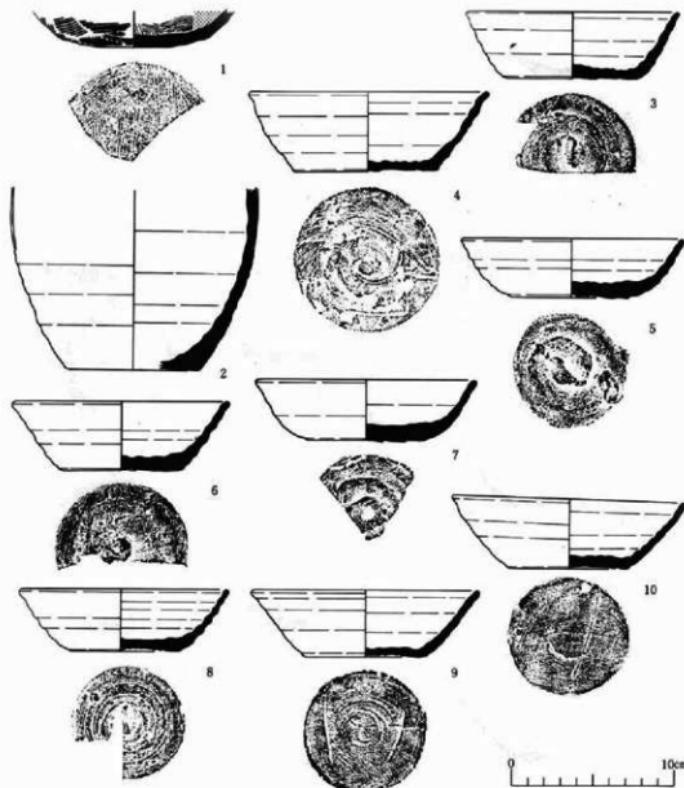
〔遺物〕堆積土第1~3層と床面から遺物が出土している(第5表、第17図~19図)。床面 土師器には頸部に段、底部に木葉痕をもつ非ロクロ調整(I類)の甕がみられる。須恵器ではヘラ切り無調整(II A類)、およびヘラ切りで底部周縁に手持ちケズリのある(II・類)杯(第17図1、2)、高台杯(第17図3)、甕破片がみられる。堆積土 第3層からは甕破片が1点出土したのみである。第1、2層からは多量の土器が出土した。まず、第2層のものをみると、土師器ではI類の甕とロクロ調整(II類)の甕の両者がみられ、前者が多い。須恵器杯ではII A類のものと底部全面に手持ちケズリ調整が加えられているもの(IV・類)とがみられ、前者が多い。須恵器には、この他に扁平な宝珠形のつまみを持つ蓋や壺・甕の破片が出土している。第1層のものをみると、土師器では非ロクロ調整(I類)の杯と甕、およびII類の甕などがあり、甕はI類のものが圧倒的に多い。須恵器では多量の杯をはじめ、小型の高台杯(第19図4)、扁平なつまみをもつ蓋(第19図6)、頸部に「金」ないし「全」かと思われる焼成前のヘラ描きがある甕(第19図7)などが出土している。杯はII A類のもの10点、II・類のもの4点、糸切り無調整(III A類)のもの4点、底部全面がナデ調整されている(IV・類)もの1点で、ヘラ切りのものが圧倒的に多く、それに糸切りのものが若干共存している様相がみられる。



土器観察表

番号	種類	基盤	底内・底外	底面外縁	内面	その他の特徴	分類記号	登録番号
1	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底面	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 底面扁、内外面大ダスク	B.A.16	012
2	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底面	ロタリナド	ハラ切り持ちタスリ	ロタリナド 底扁、内外面大ダスク	B.A.16	013
3	浅鉢	高台形	(昭61-1-25)底面	ロタリナド	高台	ロタリナド 灰白色	B.16	007
4	浅鉢	鉢				ロタリナド 灰白色	B.16	033
5	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 内面丸ダスク	B.A.16	005
6	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 内面丸ダスク	B.A.16	001
7	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 口縁部を欠く、内外面大ダスク	B.A.16	018
8	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	手跡なタスリ	ロタリナド 手跡	B.16	020
9	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 内外面大ダスク多め、灰白色	B.A.16	021
10	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 手跡	B.A.16	009
11	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド	ハラ切り無底型	ロタリナド 口縁部に鋸く内側する	B.16	010
12	浅鉢	鉢	(昭61-1-25)底	ロタリナド+のぼりフリ		ロタリナド つまみ上部には江平縫、細縫色	B.16	009

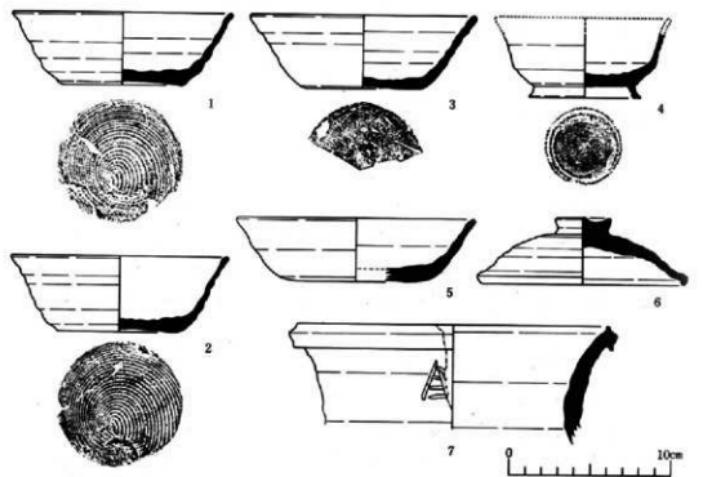
第 17図 S.I. 25住居跡出土遺物 (1) - 床面・堆積土第 2層



土器観察表

番号	種類	基盤	底面・側面	底面外山	底面外山	内山	その他の特徴	分類記号	目録番号
1	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	八方形	ハケ付(丸底)	丁方平・黑色地埋		I-F36	R-420
2	土器鉢	盤	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	十字形	口輪削き丸く		I-B16	031
3	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ	内外面大ダメ年	I-A36	023
4	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ	底部が大きく高い	I-A36	024
5	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ		I-A36	025
6	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ	外腹丸ダメ年	I-A36	026
7	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ		I-A36	027
8	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃無縫隙	ロタリーチャコ	内腹丸ダメ年	I-A36	028
9	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃一側丸ケルリ	ロタリーチャコ	内腹内に凹凸多く底面にうすまきの施釉入心、口は尖形、内外面丸ダメ年	I-B36	029
10	土器鉢	盆	0866-1-25-1 底	ロタリーチャコ	八方切刃一側丸ケルリ	ロタリーチャコ	内外面大ダメ年	I-B36	030

第 18 図 S I 25住居跡出土遺物 (2) - 堆積土第 1 層



土器観察表

番号	種類	断面	地区・部位	陶器外面	内部	その他の特徴	分類記号	算出番号
1	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ 高凸り無地	ロクロナメ	内外面大ダメージ	壺 A 壺	027
2	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ 高凸り無地	ロクロナメ	無地	壺 A 壺	028
3	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ ハラヨリ一跡もなし	ロクロナメ	外面丸ガスク、灰白色	壺 A 壺	029
4	壺	高凸	S I 25-1 层	ロクロナメ 凹斜タヌリ一筋付	ロクロナメ	口縁部分欠く	壺 B 壺	030
5	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ ナメ	ロクロナメ		壺 B 壺	031
6	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ	ロクロナメ	元井筒穴や火灰をもじむん曲する	壺 B 壺	032
7	壺	折	S I 25-1 层	ロクロナメ	ロクロナメ	内外面白地。隠れ面のハラヨリあり	壺 B 壺	033

第19図 S I 25住居跡出土遺物(3) - 堆積土第1層

2. 掘立柱建物跡

S B 24建物跡

西地区北東部の地山面で確認した建物跡である(第4図)。S D07 およびピットとの重複がみられ、本建物跡はこれらよりも古い。8個の柱穴で構成され梁行2間、桁行2間の南北棟の建物で、方位は東側柱列でN5°Wである。規模および柱間寸法は桁行が東側柱列で4.03m(南から1.88+2.15)、西側柱列で4.57m(南から2.35+2.22)、梁行が南側柱列で3.15m(東から1.25+1.90)、北側柱列で3.60mである。各柱列の柱穴は直線上に並ぶが、柱間寸法は不統一で、プランは全体としてゆがんだ方形をなしている。柱穴は保存の良いものは一辺45cmほどの方形をなし、深さは35cmほど残存している。柱穴の埋め土は地山のブロックを含むやや堅い暗褐色土で、すべての柱穴に共通している。柱痕跡は径15~20cm

ほどの円形である。遺物は全く出土していない。

3. 土 拡 跡

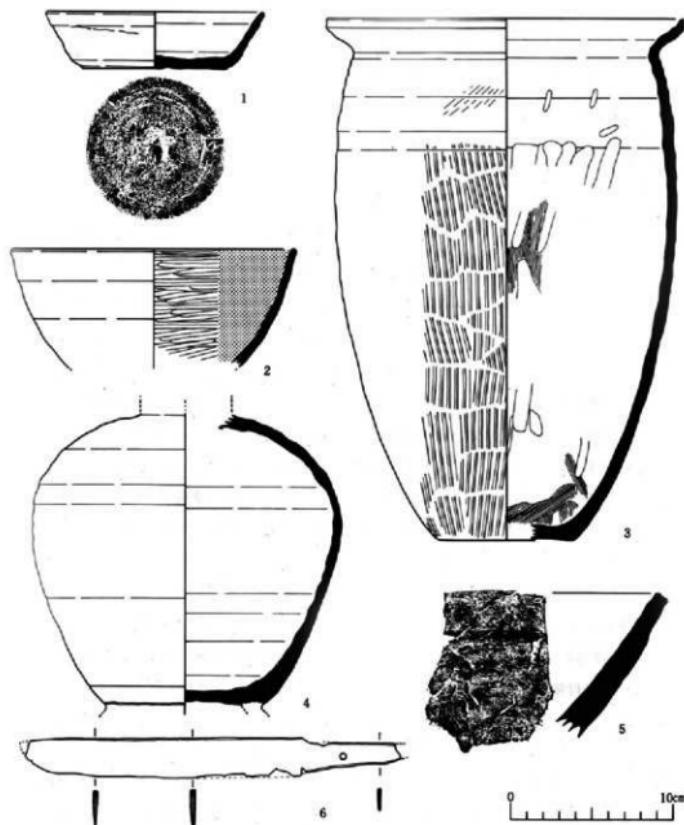
西地区で4基(S K08, 15, 17, 18)の土拡が検出されている。確認面はS K08が第2層上面であり、他はすべて地山面である。平面形や規模、重複関係、出土遺物などは第6・7表に示したとおりであるが、以下にそれぞれの土拡について注目される点を述べる。

S K08はやや不整な方形の浅い土拡で、堆積土である柔かい黒色土中からは土師器・須恵器片や染付の磁器片が数点出土した。S K15は楕円形の深い土・である。堆積土である地山のブロックを含む柔かい黒褐色土中からは少量の土師器・須恵器が出土した。須恵器の中にはヘラ切無調整(II A類)の完形杯(第20図1)1点が含まれている。S K17は不整椭円形の深い土で、堆積土は地山ブロックを含むやや堅い暗褐色土であり、一手に埋められている。埋土からは少量の土師器片が出土した。S K18は方形の比較的深い土拡であるが、新しいビットと重複しており上半が削平されている。堆積土は2層に分かれ、上層には焼土が多量に含まれ、下層は暗褐色土である。周壁や底面は焼けていない。多量の土師器・須恵器が出土しているところから、土器溜め的な土・であろうと思われる。土師器にはロクロ調整の内黒杯(第20図2)や長胴甕(第20図3)などがみられ、須恵器では口頸部・高台部を欠く長頸壺(第20図4)などがある。

第6表 土・溝・井戸一覧

S Kは土・、SDは溝、SEは井戸

遺構	発 出 面	形 状	規 模	堆積形態	備考
SD06	地 山 面	横断面U字形	幅約2.2m、深さ約50cm	SD07より新	底面に砂の堆積がみられる
SD07	地 山 面	横断面逆台形	幅約90cm、深さ約25cm	SD06・SE09・SE11より古 S 112・SB2より新	SD23と同一溝か
S K08	第2層上面	平面形は不整方形	東西2.4m、南北2.6m、深さ約12m	S 112より新	塗付磁器出土、刃世以降か
SE09	第2層上面	平面形はほぼ円形	径約1.9m(深さ約2m)	SD07より新	南西に落込部、素面り井戸
SE10	地 山 面	平面形はほぼ円形	径約2.2m(深さ約5.5m)	S 112より新	素面り井戸
SE11	地 山 面	平面形はほぼ円形	径約1.5m(深さ約5.5m)	SD07より新	素面り井戸
S K15	地 山 面	平面形は椭円形	長軸1m、短軸70cm、深さ10cm	なし	
SD16	地 山 面	横断面逆台形	幅約50cm、深さ約25cm	なし	
S K17	地 山 面	平面形は不整椭円形	長軸75cm、短軸60cm、深さ15cm	なし	
S K18	地 山 面	平面形は長方形	幅50cm、横60cm、深さ約36cm	新しいビットにより上半削平	土器を多量に含む
SE19	地 山 面	平面形はほぼ円形	径約1.8m、深さ1.15m	なし	南西に落込部、中世陶器出土
SE20	地 山 面	平面形はほぼ円形	径約1.9m(深さ1m以上)	なし	素面り井戸、塗付磁器出土
SE21	第2層上面	平面形はほぼ円形	径約2.3m(深さ30cm以上)	SD22より新	昭和初期頃まで使った井戸
SD22	地 山 面	横断面U字形	幅約1.3m、深さ約20cm	SE21より古、SD23より新	塗付磁器出土
SD23	地 山 面	横断面U字形	幅約50cm、深さ約25cm	SD22より古	SD07と同一溝か
SD26	地 山 面	横断面箱型形	幅約40cm、長さ約3.5m、深さ30cm	S 125より古	両端が立上がる溝



土器観察表

番号	種類	基盤	地区・層位	体形・外観	底面外観	内面	不規則な物語	分類番号	登録番号
1	深鉢型	泥	SK 15-3-15	クロロナデ	ハニカム断面型	クロロナデ	内底大スルガ	B ASB	R 007
2	土加型	泥	SK 18-4-18	クロロナデ	ミダリ・黒色地斑			B BB	001
3	土加型	栗	SE 19-4-18	リラキオクロロナデ	ケメリ	クロナデーナデ	2種の大小複数網目、外面にうすく印 上をはりつけている	E ASB	003
4	深鉢型	泥加型	SK 15-4-18	クロロナデ・凹凸・テヌ	高台	クロロナデ	白粉墨・萬葉文式	赤 1號	002
5	平鉢型	泥	SK 18-4-19	ナデ	自然形		口縁厚縮、切迹褐色		004

鉄製品観察表

番号	種類	地元・層位	目的	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	不規則な物語	分類番号	登録番号
6	小刀	SK 15-4-19-鉄頭	基盤先端部大頭	22.8	22	3	表面に刃利穴と鋸わり		002

第 20 図 SK 15 SK 18 土、SE 19 井戸出土遺物

第7表 土塗溝、井戸関係出土遺物一覧

遺物		SD06	SK08	SE09	SK15	SK17	SK18	SE19	SD22
器 土 師	杯						[II(3)] 1		
	甕	[I(0)] 1	[I(0)] 2		[III-[I(0)] 2	[I(0)] 3	[III-[I(0)] 8		[III-[I(0)] 3
須 恵 器	杯				II(A(1)) 1		1	2	
	高台杯	1					1		
	蓋	III(I) 1	1					1	
	甕		2			I(D) 1			
瓦	甕	1	3	1		1		1	4
			1						
その他			財 漆器(0)				中型漆器(0) 大型漆器(0)		財 漆器(0)

〔 〕は途中までの類型がわかるもの、() は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数

4. 溝跡

形態の比較的明らかな溝が西地区で3本(S D06, 07, 16)、東地区で3本(S D22, 23, 26)検出された。その他両地区から多数の浅い溝が部分的に検出されている。これらの溝は、発掘基準線に対して南北方向に延びるもの(S D6, 22)と、北東—南西方向に延びるもの(S D07, 16, 23, 26)の2つのグループに分けられる。重複関係は第6表に示したとおりで、前者の溝が後者の溝より新しい。これらの溝は調査区外にまで延びるものが多いが、S D26だけは両端が立上がりで、長さは約3.5mほどであることが知られる。このS D26は重複関係からS I 25住居跡よりも古い時期のものである。なお、S D23はS D07のほぼ延長線上にのり、方向や形態などが類似するところから同一溝の可能性が強い。

遺物はS D06、S D22から少量の土師器や須恵器が出土した他、S D22からは近世以前と思われる染付陶器も出土している(第7表)。

5. 井戸跡

西地区から4基(S E09, 10, 11, 19)、東地区から2基(S E20, 21)の計6基が検出されている。確認面はS E09とS E21の2基が表土下の第2層上面であり、他の4基はいずれも地山面である。検出された井戸からは側板などが全く検出されず、また堆積土などにもその痕跡が認められないことから、すべて素掘りの井戸とみられる。平面形はほぼ円形をなし規模は径約1.5~2.3mほどである。側壁の立上がりは比較的急で検出面からの深さは完掘したS E19の場合115cmほどと深い。他は湧水が激しく、かつ側壁が軟弱で危険なため完掘できなかったが、ボーリング探査を行った結果、S E09が約2m、S E10・S E11が約5.5mほどであることが確認できた。S E09とS E19には南西部から井戸に向かっ

て、しだいに深くなる落ち込み部が認められた。井戸内と同じ堆積土であることから、井戸に関連する施設とみられる。

遺物は S E09 から須恵器片、S E19 から少量の須恵器片と共に中世と思われる捕鉢片(第20図5)や鉄製の小刀(第20図6)、S E20 から染付磁器片が出土している(第7表)。なお、S E21 は近年(昭和初年頃)まで佐藤敏夫氏宅で使用していたものだったらしい。

6. ピット群

西地区および東地区で多数のピットが検出されている。これらは形や大きさ、埋土、柱痕の有無などがまちまちで配列にもとくに規則性をもたない。大きさにおいては S B24 の柱穴よりは小さ目のものが多いようである。遺物もほとんど出土しない。

7. 第1層・第2層出土の遺物

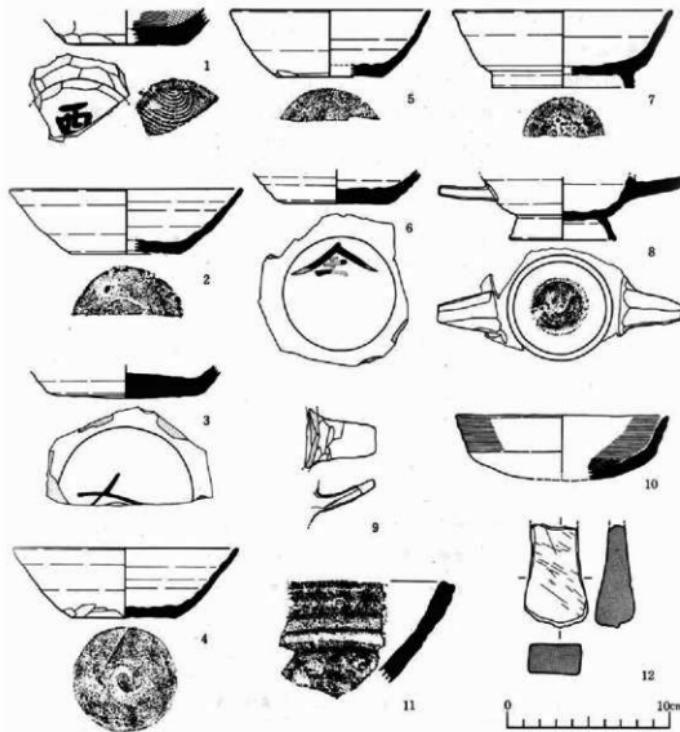
第1層は耕作土である。第2層は調査区全面にみられる黒色土層であるが、全体に第1層からの擾乱が著しく遺物は第1層と完全に区別して取り上げることが困難であった。したがってここでは第1層と第2層の遺物を一括して紹介することとしたい。

西地区の1・2層からは多数の遺物が出土している(第8表、第21図・22図)。遺物には土師器、須恵器、砥石、中世陶器、繩文土器、馬歯、古錢がある。土師器には非ロクロ調整(I類)の杯・甕や、ロクロ調整(II類)の杯・高台杯・甕などがみられる。この中には糸切りで体部下半から底部周縁にかけて手持ちケズリ調整されている内黒杯(II・類)の底部外面に「西」の墨書きがみられるもの(第21図1)がある。文字の下半が欠損しているため、これが単独で1文字であるのか、「栗」や「粟」などの冠部なのかは判然としない。

第8表 第1層・第2層出土遺物一覧

層位 遺物		西地区 第1～2層	東地区 第1～2層
土 師 器	杯	II・(1)・II・(1)・II・(2)〔I (5)・II (5)〕	18
	高台杯	〔II (1)〕	1
	甕	I D (1)・I E (8)・I G (2)・II C (4)・〔I (22)・II (21)〕	258
須 恵 器	杯	II A (20)・II・(3)・II・(1)・III A (5)・IV・(14)・IV・(3)	109
	高台杯	IV (2)	16
	蓋	II (1)	10
	甕		12
瓦	甕		175
	瓦		7
その他		中世陶器(1)、繩文土器(1)、馬歯(2)、古錢(1)	中世陶器(1)

〔 〕は途中まで類型がわかるもの、()は類型・種類別出土数、ゴシックは出土総数



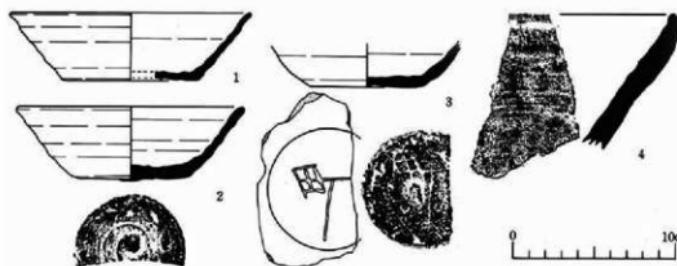
土器観察表

番号	種類	断面	地区・層位	表面外観	底面外観	内面	その他の特徴	分類記号	登錄番号
1	土器鉢	鉢	0001+2層	テクスチャ	底切り→ズリ	ミキモ、黒色地質	口縁部を欠く。底面に墨書き「西」か?	B・B	B-0001
2	直底鉢	鉢	0001+1層	コトコトテグ	テラリム無底盤	ロカロナナ	赤褐色	B・A	B-0002
3	直底鉢	鉢	0001+1層	コトコロテグ	テラリム→ズリ	ロカロナナ	底面外周に墨書きあり(鉢底不適)	B・B	B-0003
4	直底鉢	鉢	0001+1層	コトコトテグテグ	テラリム→ズリ	ロカロナナ		B・B	B-0004
5	直底鉢	鉢	0001+2層	コトコロテグテグ	テラリム	ロカロナナ	内面底大ガスク	B・B	B-0005
6	直底鉢	鉢	0001+2層	コトコロテグ	ズリ	ロカロナナ	赤褐色。底面外周に墨書き「金」か?	B・B	B-0006
7	直底鉢	直底鉢	0001+1層	コトコロテグ底足	テラリム→底白	ロカロナナ	内面に粗粒物	B・B	B-0007
8	直底鉢	直底鉢	0001+1層	コトコロテグ底足	テラリム→底白	ロカロナナ	底部に墨書き付ける事多々をもつ	B-0008/B-009	B-0008
9	直底鉢	直底鉢	0001+2層	コロナナ	テラリム→底白	ロカロナナ	青褐色		0009
10	直底鉢	鉢	22	コロナナ	テラリム→底白	ナゲ	灰白色。底面内面に褐斑あり		0010
11	中空鉢	直 鉢	0001+1層	ナゲ	ナゲ	ナゲ	口縁部上端が不規則凹凸。灰黑色		0011

石製品観察表

番号	種類	断面	層位	石質	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他の特徴	分類記号	登録番号	
12	石	石	0001+2層	半火成岩	高砂シテ	60.0	30	21	上面の研磨面をもつ		0012

第21図 西地区第1、2層出土遺物



土器観察表

番号	場所	説明	地区・層位	器内・外面	底部外周	内底	その他特徴	分類記号	分類番号
1	須恵器	杯	0层+1層	ロクロナゲ	ヘラ切手無痕型	ロクロナゲ		B A 1a	615
2	須恵器	杯	0层+1層	ロクロナゲ	ヘラ切手無痕型	ロクロナゲ	内底火ダメキ	B A 1a	617
3	須恵器	杯	0层+1層	ロクロナゲ	ヘラ切手→テスリ	ロクロナゲ	無痕型。底部外周に焼成後のハラ跡あり	B + 1a	602
4	中世陶器	壺	88	ナゲ		ナゲ	口縁部上端がやや削れ、暗灰色。内面擦痕		602

第22図 東地区第1層出土遺物

須恵器には多量の杯、甕をはじめ高台杯・蓋・壺などがある。杯は底部がヘラ切りのもの（II A類）や全面が手持ちケズリされ、切離し不明のもの（IV B類）などが多数を占めており、糸切りのもの（III A類）も若干みられる。これらの他に灰白色を呈し内外全面がナデ調整され、ロクロ痕跡を全く残さない丸底気味の杯（第21図10）もみられる。焼成はかなり堅緻である。杯には底部外面に墨書のみられるものが2点ある（第21図3・6）。3は墨痕が部分的で判読できない。6は「金」ないし「全」かと思われる。高台杯には双耳の付くものが2点（第21図8・9）みられる。これらの土師器・須恵器の出土状況をみると、おもに住居跡が検出された地区に集中しており、本来は住居跡の堆積土に含まれていた可能性が強い。中世陶器は播鉢の口縁部破片（第21図11）で、口縁部上端にわずかな凹をもつ。砥石は4つの研磨面をもつ半欠品（第21図12）である。

東地区的出土遺物には土師器・須恵器・中世陶器などがみられるが出土量はきわめて少なく、しかもS I 25住居跡地区に集中している。土師器・須恵器は西地区やS I 25住居跡出土のものとほぼ同じ特徴をもつものである。須恵器杯には底部外面に焼成後のヘラ描きがあるものが1点（第22図3）である。中世陶器はやはり播鉢の破片である（第22図4）が筋目はみられない。

V 考 察

1. 遺物について

(1) 土器の分類

土器の分類は『伊治城跡 1』(註 1)に準拠したが、新たに類型を加えたものもあるので今回出土している全類型について簡単に説明しておきたい。

〔土師器〕杯、椀、高台杯、蓋、甕がある。

杯には非ロクロ調整のもの（I 類）と、ロクロ調整のもの（II 類）とがある。I 類には丸底で底部から口縁部にかけて内齊気味にひらきながら立上がるもの（I F 類）と、平底で同様の立上がりを示すもの（I G 類）とがある。調整は体部外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理されているものが多いが、I F 類の中には外面がハケ目調整されているものもある。II 類は出土数が少なく全体の特徴が明確なものはないが、底部切離しにはヘラ切りのもの（II A 類）、回転糸切りのもの（II B 類）、ヘラケズリのため切離し不明なもの（II C 類）がみられる。II 類には底部切離し後体部下端ないし底部外面に、1. 全く調整を受けないもの、2. 手持ちヘラケズリが施されるもの、3. 回転ヘラケズリが施されるものの、各種がみられる。内面はすべてヘラミガキ・黒色処理されている。杯にはこの他に、内外両面がヘラミガキ・黒色処理され、I 類か II 類か不明のものも少量みられた。

椀はすべて非ロクロ調整（I 類）で、体部に一条の沈線をもつもの（I A 類—第 3 図 3）と体部に沈線や段をもたないもの（I B 類—第 9 図 8）とがある。調整はすべて体部外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

高台杯、蓋は少量出土しているのみである。これらには内外両面をヘラミガキ・黒色処理されたものもある。

甕には非ロクロ調整のもの（I 類）と、ロクロ調整のもの（II 類）とがある。I 類はさらに器形によって、頸部に沈線ないし段をもつ長胴形のもの（I D 類）、頸部に沈線や段を持たずなどらかに屈曲する長胴形のもの（I E 類）、頸部に沈線や段をもたない胴部楕円形のもの（I F 類）に分けられる。これらの調整は口縁部はすべて内外面ともにヨコナデされているが、体部はハケ目、ミガキ、ケズリ、ヘラナデなどによる調整がみられ、かなり多様性がみられる。これらの他に内面をヘラミガキ・黒色処理したもの（I G 類）もみられるが、小破片のため器形の特徴は不明である。II 類は器形、法量により、器高が 30 cm 前後で長胴形のもの（II A 類）と、器高が 15 cm 前後と小型で口縁径が器高とほぼ同じかそれよりもやや大きいものの（II B 類）に分けられる。調整は II A 類ではロクロ調整以前にタタキ調整をうけるものや、ロクロ調整後ヘラケズリされるものなどがみられるが、II B 類で

はロクロ調整のみのものが多い。これらの他に内面をヘラミガキ・黒色処理したもの（II C類）も少量出土しているが、小破片のため器形の特徴は不明である。

【須恵器】杯、高台杯（双耳杯を含む）、蓋、壺、甕がある。

杯は器形による分類を試みたが、形態変化が連続的で截然と分類することが困難であった。したがって、ロクロからの切離し技法とその後の調整方法およびその範囲をもとに以下のように分類した。ヘラ切りで無調整のもの（II A類）。ヘラ切りで底部が手持ちヘラケズリされているもの（II・類）。ヘラ切りで体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリされているもの（II・類）。糸切りで無調整のもの（III A類）。糸切りで体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリされているもの（III・類）。底部全面が手持ちヘラケズリされ切離し不明のもの（IV・類）。体部下端と底部全面が手持ちヘラケズリされ切離し不明のもの（IV・類）。底部全面がナデ調整され切離し不明のもの（IV・類）。なおこれらの他に内外両面にヨコナデやナデ調整が加えられ、ロクロ痕跡を全く残さない丸底風の杯（第21図10）が2点ほどある。

高台杯は杯部の器形および高台の特徴により次のように分類される。杯部が外反しながら立上がり、体部下半に丸味のある稜をもち、比較的大きくて浅い器形で、やや高い高台をもつもの（III類）。杯部が直線的に立上がり、体部下半がゆるやかに屈曲するため稜が不明瞭な比較的小さくて深い器形で、先端が肥厚する高台をもつもの（IV類）－この類には体部の中位に双耳が付くものも少数ある。杯部がやや内湾しながら立上がり、稜をもたず、比較的大きくて深い器形で、外方にふんばる高台をもつもの（IV類）などである。

蓋はつまみや天井部の形、口縁端部の特徴などを観察したが個体差が大きく、まとまりはみられない。したがって、ここではつまみの形態により次のように分類した。この場合でも形態変化が連続的で必ずしも明確な分類とは言い難い。宝珠形のつまみをもつもの（I類）。やや扁平な宝珠形のつまみをもつもの（II類）。中央部が周縁部よりも低い扁平な宝珠形のつまみをもつもの（III類）。

壺はすべて長頸壺（I類）である。

甕は器形と法量により次の3つに分類される。器高が60cm前後で、胴部に最大径をもつ丸底の大甕（I類）。器高が30cm前後で胴部に最大径をもつ平底甕（II類）。器高が15～20cm前後で、口縁部に最大径をもつ鉢に近い器形の平底甕（III類）。

（2）住居跡における土器の様相とその年代

次に前項の分類をもとに住居跡における土器の様相をみてゆきたい。すでに述べたように、S I 12の第1層・4層、S I 13の第1～3層・細部、S I 25の第1層などからは比較的多量の土器がまとまって出土している。これらの各層から出土した土器には以下のよう

な共通した特徴が認められた。①土師器では杯および椀がⅠ類で、甕にⅠ類とⅡ類の両者がみられる場合と、杯・椀にも甕にもⅠ類とⅡ類の両者がみられる場合がある。杯・椀・甕すべてがⅠ類のみ、ないしはⅡ類のみといった組合せは全くみられない。②須恵器では杯でⅡA類が最も多くみられ、ⅢA類やⅣB類・ⅣD類がこれに少量加わっている。このような内容をもつ土器の組成は第1次調査で検出したS I 04 住居跡においても注目されていたところであり、また多賀城のS I 462 住居跡、S I 495 住居跡、S B 224 盛土整地層などの遺構(註2)でも同じ様相が認められることから、決して年代の異なる土器の混在などではなく、むしろ一定の年代における土器使用のあり方を反映しているものであることを思わせる。そこで本遺跡で特徴的にみられるこのような土器組成を以下の記述では便宜上「伊治城型組成の土器群」と呼ぶこととしたい(註3)。なおこういった土器の年代については『伊治城跡I』でも若干考察しておいたが、ここで改めて取り上げて検討しておきたい。「伊治城型組成の土器群」のうち、Ⅰ類の土師器は陸奥国分寺跡僧房西建物基壇南側の溝中からまとまって発見され(註4)、国分寺下層式とされている(註5)土器と同一の特徴をもつものであり、Ⅱ類のものは表杉ノ入式(註6)の土器と同じ特徴を備えている。したがって土師器は国分寺下層式と表杉ノ入式の両者の特徴をもつ土器によって構成されていることが指摘できる。また須恵器ではⅡA類のものを主体とすることを特徴としている。他遺跡における須恵器のあり方をみると、志波姫町糠塚遺跡の国分寺下層式期の堅穴住居跡(註7)から出土した須恵器杯ではⅡA類のものが最も多くみられる。また岩手県胆沢城跡では創建当初頃のものとみられている外郭南門付近のS D 114 溝から一括出土した表杉ノ入式の土師器(註8)に共伴している須恵器杯もⅡA類が主体をなしている。したがって本土器群の須恵器は例示した両遺跡とほぼ類似した様相を呈していることが知られる。以上により「伊治城型組成の土器群」は土師器で見る限り国分寺下層式と表杉ノ入式との間に位置づけることが妥当かと考えられる。ところで、陸奥国分寺の創建は8C中頃とされており、創建当初頃の建物に伴うとみられる溝中からまとまって出土した土器群はこの時期の土師器が国分寺下層式であったことを示している。また胆沢城は802年に造営されたことが正史により明らかであり、S D 114 溝出土の土器をみるとこの頃の土師器はすでに表杉ノ入式であったことが知られる。こうしたことからみて、「伊治城型組成の土器群」の年代は8C末頃と見做すのが最も穩當なところではないかと考えられる。

(3) 遺物からみた遺跡の性格

今回の調査で検出された遺構のうち、確実に古代のものとみられるものは堅穴住居跡や土・・溝などであり、遺構の面からは城・・官衙的な性格は殆んどうかがうことができない

かつた。しかし、出土遺物の中には若干なりともこういった性格を反映しているのではないかと思われるものがいくつかみられた。

まずこれらの遺構から出土した土器をみると、土師器よりも須恵器の多いのが目につく。これは特に杯、榠、高台杯など供膳形態の土器に顕著で、堅穴住居出土土器の場合、こういった小型品における土師器と須恵器の比は1:5ほどであり、須恵器が圧倒的に優位を占めている。このような土器のあり方は多賀城跡や桃生城跡などと極めて近似した現象といえよう。また、これらの土器の中には墨書のあるものが7点ある。墨書土器は第1次調査でも6点出土し、さらに照明寺に保管されている土器の中にも多数含まれており、本遺跡の特徴的な遺物といえる。今回出土した墨書土器の中で比較的墨痕が明瞭で判読可能なものには「常陸口」^(現)、「金」、「金ないし全」、「本」、「西(?)」などがある。1文字だけのものは、それが何を意味するのか判然としないが、「常陸口」の墨書については日本後紀延暦15(796)年11月戊申条の「発=相模。武藏。上総。常陸。上野。下野。出羽。越後等国民九千人。遷=一置陸奥国伊治城」^(現)という記事との関連が想起され、興味深い。この土器が出土したS I 14住居跡は、次項で述べるように大体8C末頃のものであり、年代的にもほぼ符合する。第1次調査で出土した「城厨」の墨書土器と共に本遺跡を理解する上で重要な遺物であろう。

S I 12・13住居跡などからは瓦や鉄製品、漆紙などが出土した。これらは伴出した土器からみて8C末頃のものであることはほぼ確実と思われる。出土した瓦はいずれも丸瓦の破片で量もそう多くはない。本遺跡ではこれまでにも重圓文軒丸瓦を含む比較的多量の瓦が発見されているが、発掘調査による瓦の出土はこれが初めてであり、しかも土器との共伴により所属年代が明らかにされたことは大きな成果であろう。鉄製品はS I 13住居跡から比較的まとまって出土しており、これには鉄鎌4点、刀子3点、紡錘車1点などがみられる。またS I 12住居跡から出土した方形の鉄製品は、透し孔や鈎脚をもち、鈎帶の巡方かと思われるものである。漆紙はS I 13住居跡から1点出土している。これは土師器杯に取り分けた漆の蓋紙として使用され遺存したもので、遺存状況は多賀城出土のものと全く同一であるが文字は今のところ確認されていない。本遺跡内でも塗塗りの作業が行われていたことをうかがえる資料と言えよう。以上に述べた瓦や鈎帶金具かと思われる鉄製品、漆紙などの遺物は、これまでの例ではいずれも城・官衙やこれに類する遺跡から出土することが一般的であり、本遺跡の性格の一端を示しているものとみることも可能であろう。

2. 遺構について

(1) 各遺構の年代

前節では土器の分類を行い、その年代について述べた。ここではこれらをふまえて各遺

構の年代を検討してみたい。各遺構出土の土器については第2～8表に分類別の出土数を示してあるので、各々の土器の詳細は省略する。

まず、住居跡の年代についてみてゆきたい。S I 13では前節で述べたように細部と堆積土第1・4層から「伊治城型組成の土器群」が出土している。床面出土の土器もこれとほぼ同じ特徴のものである。S I 12・S I 14・S I 25住居跡では床面や細部からの土器の出土量が少なく、年代を明確にできる程のまとまりはみられない。しかし、S I 12では床面直上に堆積している第4層出土の土器、S I 25では第1層出土の土器が「伊治城型組成の土器群」であり、いずれの場合も床面出土の土器はこれとほぼ同じ特徴をもつものである。したがって、両住居跡とも床面の土器は基本的にはやはり「伊治城型組成の土器群」の一部とみることが可能かと思われる。S I 14では土器の絶対量は少ないが出土した土器のすべてがやはり「伊治城型組成の土器群」と同一の特徴を備えている。以上により、今回検出された住居跡は概略的にみてほぼ「伊治城型組成の土器群」に代表される時期とすることが可能と思われ、その年代はほぼ8C末頃におくことができよう。

S B 24掘立柱建物跡の柱穴からは遺物は全く出土しておらず、年代は不明である。

土・ではSK 18からやまとまりのある土器が出土している。土師器にはI類の杯・甕とII類の甕とがみられる。また、SK 15からはII A類の須恵器杯の完形品が出土している。これらは土器の特徴からみて住居跡群とほぼ同じかその直後位の年代のものであろう。SK 08からは染付磁器片が出土していることから近世以降のものとすることができる。SK 17からは土師器・須恵器片が少量出土しているのみであり、所属年代は限定できない。

溝ではSD 22から染付磁器片が出土している。したがってこれは近世以降のものとみることができる。他の溝は出土遺物に乏しく遺物による年代の限定はできない。ただし、SD 26はSI 25住居跡との切合い関係からこの住居跡よりは古いものであることが知られる。

井戸ではSE 19から挿鉢片が出土しているので中世以降のものとみることができ、またSE 20は染付磁器片の出土により近世以降とすることができます。SE 21は昭和初期頃まで実際に使われていたことが明らかである。SE 09は第2層上面で確認された井戸であることから考えて、そう古い年代のものではないことが推測される。SE 10・11からは遺物は全く出土しておらず、所属年代は不明である。規模や形態の類似により、年代的には他の井戸とそう違わないのかも知れない。

ピット群については出土遺物もなく、年代は全く知り得ない。

(2) 壓穴住居跡について

今回の調査では4軒の壓穴住居跡が検出された。これらは規模や形態的特徴などによりSI 12・13とSI 14・25の2つのグループに分けられる。まず、SI 12とSI 13とは一辺

が6m前後で比較的規模が大きく、方位も東壁がN11°～13°Wでほぼ一致している。カマドはいずれも北壁の中央部に付設されており、4個の主柱穴も住居の対角線上に規則的に配置されている。これに対してS I 14とS I 25は一辺が約3.2m前後と小型で、面積は前者の約1/4ほどしかない。カマドは壁のややコーナー寄りに付設されており、柱穴もはつきりしない、など前者のグループとは全く様相を異にしている。重複などがみられず、両グループの新旧関係は不明であるが、S I 13とS I 14との距離は最短で1.3mほどで、きわめて近接した位置にあることから、両者が同時に存在していたものではなかったことも考えられる。両グループの特徴の違いが存在時期によるものか、使われ方によるものかについての結論は今後の調査に待ちたい。

竪穴の内部施設についてみると、S I 12とS I 13で須恵器の大甕を据えたとみられる土・が検出されており注目される。両住居とも北東隅付近にみられ、周囲に土手状に粘土をめぐらすといった点や、規模・構築方法なども全く同一である。こういった特徴は第1次調査で検出されたS I 04住居跡の須恵器大甕の据え穴と全く一致する。したがって、本遺跡では検出された5軒の竪穴住居跡のうちの3軒にこうした大甕が据えられていたことになる。このような遺構はこれまでの竪穴住居跡の調査ではあまり注意されていなかったものであるが、住居の使われ方にかかるものだけに今後の調査において注目してゆく必要があろう。

- 註1 宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡 1—昭和52年度発掘調査報告』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊(1978年)
- 註2 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—昭和48年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所年報1973(1974年)
- 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—昭和49年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所年報1974(1975年)
- 註3 この組成の中には、土師器において杯や椀などの小型品がすべてII類で、甕のみにI類とII類の両者がみられるといった組合のものは含まれていない。(このような土師器はこれまで表杉ノ入式とされて来たものの中に広くみられる)
- 註4 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編『陸奥国分寺跡』(1961年)
- 註5 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底甕をめぐって」山形県の考古と歴史(1967年)
- 註6 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14(1957年)
- 註7 宮城県教育委員会「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集(1978年)
- 註8 岩手県水沢市教育委員会『胆沢城跡—昭和51年度発掘調査概報』(1977年)

VI 調査のまとめ

第2次調査は政府的な官衙ブロックなどの検出を主な目的として実施し、遺跡中央部を約780m²にわたって発掘した。その結果、堅穴住居跡や土・・溝などの古代の遺構が検出され、目的とした政府的な建物などについては手懸りを得ることができなかつた。しかし検出された堅穴住居跡などは土器の検討からいずれも8C末頃のものとみられ、伊治城の存続期間とほぼ併行する時期のものであることから、これらが伊治城の中で一定の役割を持って存在していた可能性はきわめて強い。住居跡から出土した土器の中で須恵器が優位を占めていることや「常陸口」^(注1)の墨書き土器、漆紙、銅帶金具かと思われる鉄製品などの出土もこうしたことの裏付けているのかも知れない。

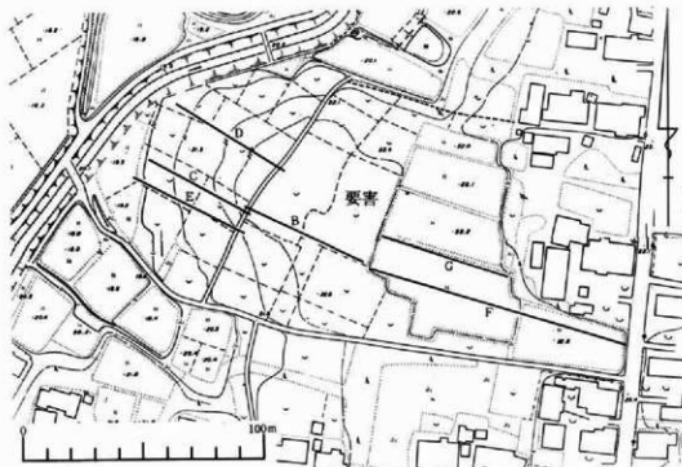
本遺跡では遺跡範囲の大部分がほぼ同じ高さをもつ平坦な台地となっており、地形などから政府的な機能を果していた地域を限定することには大きな困難がある。したがって、こういった地域を把握し、その構造を解明するためには今後さらに継続的な調査を行っていく必要があろうかと思われる。当研究所では多賀城関連遺跡第2次5か年計画の初年にあたる昭和55年度にも伊治城跡の調査を予定しており、その成果が期待される。

VII 補

1. 西外郭線の電気探査について

昭和 52 年度の伊治城跡第 1 次発掘調査で、外郭北辺土塁とその内側にある幅 10m、深さ 3.5m の大溝が検出された。土塁および大溝の痕跡は北辺では空堀状の溝としてよく残っているが、他辺では判然としない。とくに、大溝は土塁の内側にあることから、伊治城の西端部と推定される城生野字要害地区にも溝の存在が考えられた。そこで、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターにこの地区的電気探査を依頼したところ、快諾が得られ、西村康・岩本圭輔両氏の派遣を頂いた。

電気探査は両氏のもとで、昭和 53 年 11 月 11 日から 11 月 13 日までの 3 日間行われた。測定線は東西方向に約 50m の長さで 6 本設定した(第 23 図)。電極間隔は 1m、1.5m、2m、3m 等間隔と 4 段階に分け、それぞれ地下約 1.5m、2.3m、3m、4.5m の深さの電気比抵抗を調べた。その結果、要害地区の丘陵末端から約 30m の地点で溝状の落ち込みが検出された。しかしこの溝は南北方向の延びが不明確で、外郭線大溝とは断定しかねた。なお、明年度は電気探査と磁気探査を合わせて行う予定である。



第 23 図 西外郭線電気探査位置図

2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲 1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太麻呂らに叙位、下從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に坂東 8 国の百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡におく。これはもと伊治城である。 (「続日本紀」では神護景雲元年 11 月乙巳条に収めるが錯簡とみられここでは神護景雲 3 年 6 月 9 日乙巳説をとる) 6. 浮宮の百姓 2,500 人を伊治城に還す。	続日本紀
780	宝亀 11	3. 上治群大領伊治公若麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大橋、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府軍の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦 11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の伴のさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史 卷 190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に 1 駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民 9,000 人を伊治城に還し置く。	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に 3 駅をおく。	日本後紀
837	承和 4	4. 3 年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原	続日本後紀

西暦	和暦	記事	文献
		・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵 1,000 人を差発して非常に備える。	
905	延喜 5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国 100 座 栗原郡 7 座 大 1 座 表刀神社 小 6 座 志波姫神社 <small>名神大</small> 雄銳神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國志太、栗原、磐井..... ○兵部式 陸奥国駅馬玉造、栗原、磐井.....各 5 歩	延喜式
931～938	承平年間	和名類聚抄 陸奥國 栗原郡(久利波良) (郷名) 栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康平 5	8. 前 9 年の役で源頼朝軍は、栗原郡宮岡に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文治 5	8. 7. 文治の役で源頼朝の歐州攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞭櫛(仙台市)に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大將軍となし数千の勇士を差しむけた。 8. 21 頼朝郡は暴風雨について途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾妻鏡
1190	建久 1	2. 12 頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。 3. 10 栗原寺に逃げのびた兼任らが樵夫らに殺害される。	吾妻鏡

[付章] 多賀城関連遺跡第1次5か年計画の成果

多賀城関連遺跡の調査は昭和49年に始めて以来5年がすぎた。当研究所では、これまで、宮城県桃生郡河北町飯野に所在する桃生城跡と同県栗原郡築館町城生野に所在する伊治城跡の調査を実施している。年間約1か月と短い調査期間ではあったが、数々の成果があつた。本年度は第1次5か年計画の最終年度にあたるので、計画の実施状況とその成果の概略をまとめておきたい。

(1) 多賀城関連遺跡第1次5か年計画とその実施状況

文献によれば宮城県内には多賀城のほか玉造・、新田・、牡鹿・、色麻・（以上737年初見）、桃生城（758年造営）、伊治城（767年造営）など多数の古代城柵が存在したことことが知られており、その遺跡の比定地にも諸説がある。また多賀城に供給された屋瓦等の生産遺跡も県内各地で知られるようになっている。これらの遺跡が多賀城と密接な関係を有するばかりでなく、東北古代史を解明する上でも貴重な遺跡であることは自明のことである。にもかかわらず、それまで、多賀城以外の遺跡はほとんど発掘調査がなされず、指定保護等の行政措置も構ぜられないまま、土地開発などで徐々に破壊されているのが現状であった。一方、多賀城跡調査研究指導委員会や文化庁からは継続的に多賀城関連遺跡の調査を行うための年次計画立案の指導を受けた。そこで、これまで述べた主旨に基づき次のように第1次5か年計画を策定した（第9表）。調査は多賀城跡調査研究所のほか、地元在

第9表 多賀城関連遺跡調査第1次5か年計画表（昭和48年度策定）

年次	調査面積	総経費	内 訳				
			航 空 測 量	城・跡 発 挖 調 査	室 跡 発 挖 調 査		
49年度	8 5	千円 2,500	桃生城跡 推定地	千円 1,300	桃生城跡推定 地 (5a)	千円 1,200	千円
50年度	11	2,500			桃生城跡推定 地 (9a)	2,000	大吉山窯跡群 (2a) 500
51年度	7	3,000	伊治城跡	1,300	伊治城跡 (5a)	1,200	木戸窯跡群 (2a) 500
52年度	12	3,000			伊治城跡 (10a)	2,500	日の出山窯跡 群 (2a) 500
53年度	11	4,000	玉造・又は 色麻・跡	1,300	玉造櫛又は色 麻櫛跡 (9a)	2,200	安養寺窯跡群 (2a) 500
計	46	15,000	3遺跡	3,900	3遺跡 (38a)	9,100	4遺跡 (8a) 2,000

住の研究者や専門研究者の協力をえ、
地元市町村と共催して行った。

このうち、多賀城関連瓦窯跡の調査は東北歴史資料館の事業計画と一致したため、削除し、専ら城・遺跡の調査に対象を絞った。昭和 53 年度実施予定の玉造棚に比定されていた城生遺跡については、地元加美郡中新田町が国庫補助を得て、昭和 52~53 年度に調査し、当研究所も積極的にこれに参画した。また、昭和 51 年度の伊治城跡第 1 次発掘調査では、諸々の事情から、予算が 150 万円と半減したため、地形図の作成だけを行ったため、調査の一部は第 2 次 5 か年計画に持ち越すことになった。第 1 次 5 か年計画の実施状況は次のとおりである（第 10 表）。

（2）発掘調査の成果

桃生城跡の調査での最大の成果はその構造が内郭地域と外郭地域から成り立ち、これまで調査されている多賀城や城輪・等と基本的には同じ構成を示すことを把握したことである。内郭地区を画する施設は築地であり、外郭を画するそれは版築による土塁である。残存する土塁跡や地形から、桃生城の規模が東西約 600m、南北約 800m であることを推測できた点も大きな成果であった。外郭線土塁は北辺で二又に分かれ複郭をなす点も、統紀宝龜 5 年 7 月 25 日条の記載を裏付けるものであった。土塁にとりつく櫓状の建物遺構は、現在、東北諸城・で発見されているものでは最も古い時期のものだけに、その発生や性格を考える上で貴重な資料となっている。築地で画された内郭は南北が 72m、東西はやや不明確であるが約 116m ほどの規模と思われる。内郭からは 5 棟の掘立柱建物跡が検出され、築地を含めて 3 時期にわたる変遷がとらえられた。しかも、第 II 期には最も整備され、建物も東西対称形の配置をとるよう、建物配置についてもかなり具体的な見通しが得られた。出土遺物についても、8 世紀後半を中心とする時期のものであった。

伊治城については、外郭線の区画施設を解明した点が大きな成果である。それは基底幅 7m の土塁とその内にある幅 10m、深さ 3.5m の大溝である。また、城内からは 8 世紀末頃の竪穴住居跡が発見されている。東北地方の他の城・跡でも竪穴住居跡が発見されているが、今後、官衙の中での竪穴住居の性格をさぐる上で、貴重な資料となろう。

なお、調査成果の詳細は各年次の報告書にまとめている。これまで刊行した報告書には以下のものがある。

第 10 表 調査実績表

年 次	実 施 状 況		
49 年度	桃生城跡	地 形 図	1,300 千円
		発 掘 調 査	1,200
		小 計	2,500
50 年度	桃生城跡	発 掘 調 査	2,500
51 年度	伊治城跡	地形図作成	1,500
52 年度	伊治城跡	発 掘 調 査	3,000
53 年度	伊治城跡	発 掘 調 査	3,000

- (1) 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊・『桃生城跡I－昭和49年度発掘調査報告－』
(1975)
- (2) 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第2冊・『桃生城跡II－昭和50年度発掘調査報告－』
(1976)
- (3) 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊・『伊治城跡I－昭和52年度発掘調査報告－』
(1978)
- (4) 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊・『伊治城跡II－昭和53年度発掘調査報告－』
(本書)



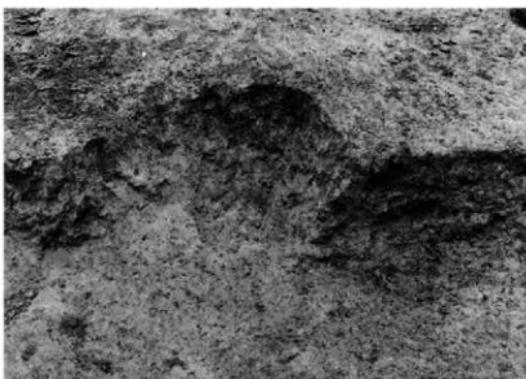
図版 1 上:西地区調査区全景(南から)
下:西地区調査区部分(南から)

図版 2

上: S I 12 住居跡
(北から)



中: 同上カマド付
近



下: 同上須恵器大
甕据え穴



図版 3

上: S I 13 住居跡
(南から)



中:同上カマド付
近



下:同上須恵器大
甕据え穴



図版 4

上: S I 14 住居跡
(西から)



中: 同上第 2 次カマド
付近



下: S D 06 溝跡
(北から)



図版 5

上: 東地区調査区
東半部(北から)



中: 東地区調査区
東半部(東から)



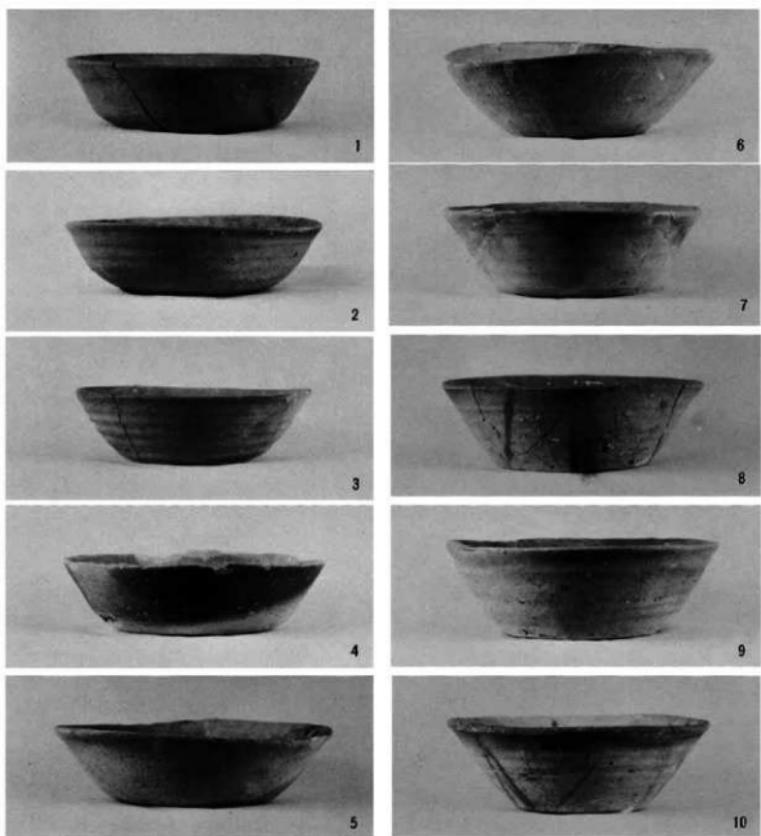
下: S I 25 住居跡
(南から)





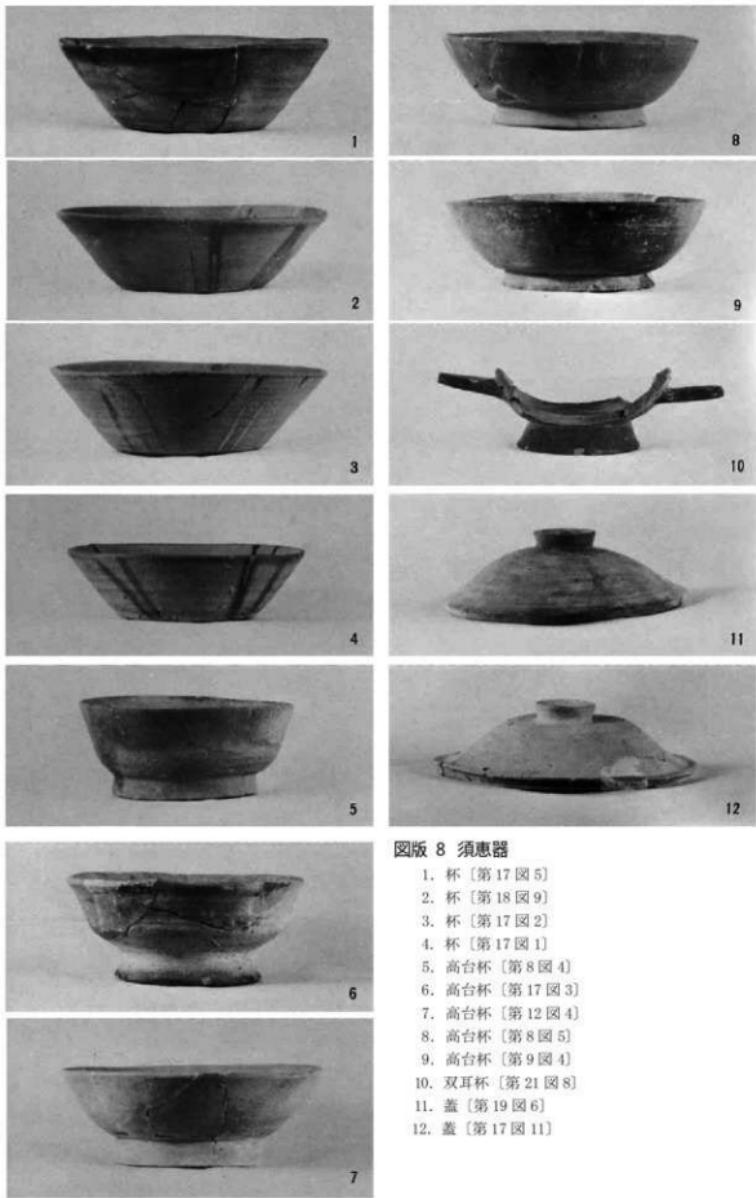
図版 6

1. 杯 [第7図4]
2. 杯 [第11図2]
b, c 漆紙の付着状況
3. 壺 [第8図2]
4. 壺 [第7図5]
5. 杯、碗、高台杯
蓋



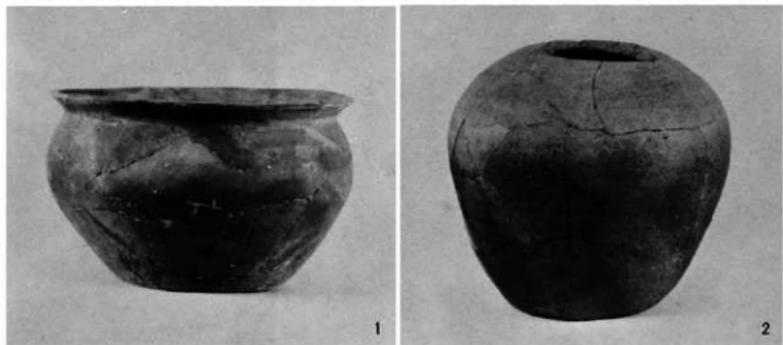
圖版 7 須惠器

1. 杯 [第 20 圖 1]
2. 杯 [第 18 圖 5]
3. 杯 [第 18 圖 8]
4. 杯 [第 15 圖 2]
5. 杯 [第 17 圖 8]
6. 杯 [第 18 圖 10]
7. 杯 [第 19 圖 2]
8. 杯 [第 11 圖 6]
9. 杯 [第 18 圖 4]
10. 杯 [第 17 圖 9]
11. 杯 [第 17 圖 10]
12. 杯 [第 12 圖 2]



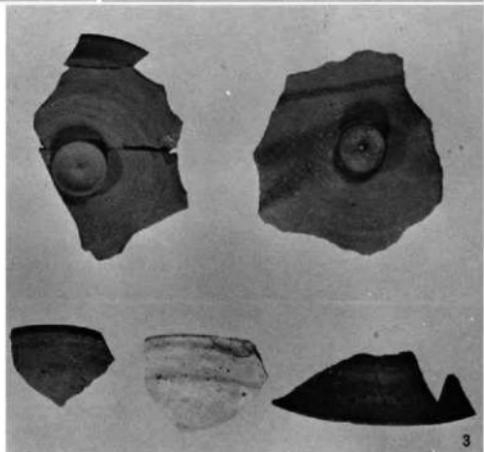
图版 8 須惠器

1. 杯 [第 17 図 5]
2. 杯 [第 18 図 9]
3. 杯 [第 17 図 2]
4. 杯 [第 17 図 1]
5. 高台杯 [第 8 図 4]
6. 高台杯 [第 17 図 3]
7. 高台杯 [第 12 国 4]
8. 高台杯 [第 8 国 5]
9. 高台杯 [第 9 国 4]
10. 双耳杯 [第 21 国 8]
11. 蓋 [第 19 国 6]
12. 蓋 [第 17 国 11]

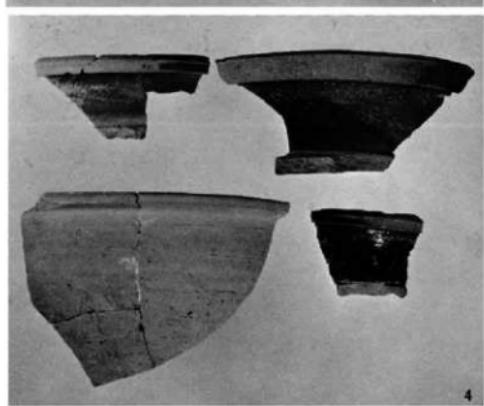


1

2



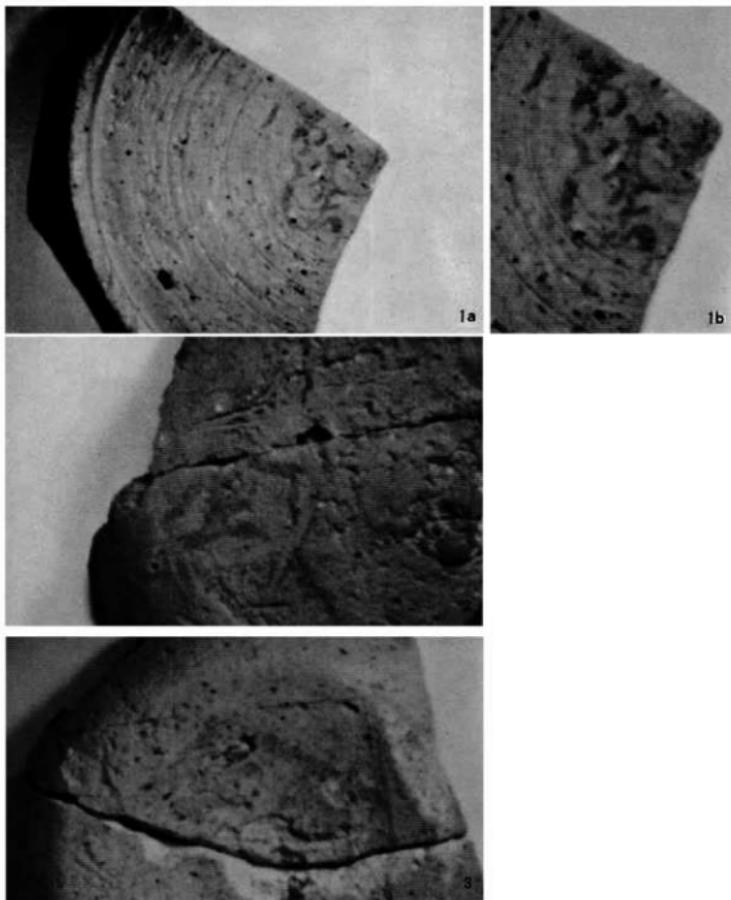
3



4

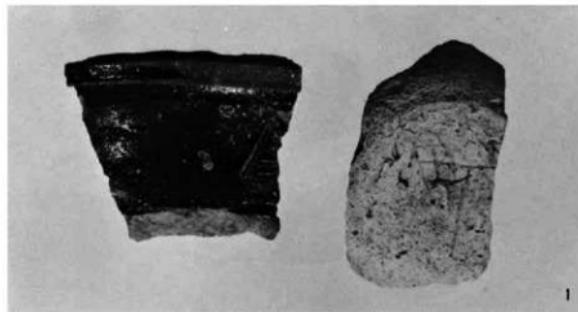
図版 9 須恵器

1. 瓢〔第8図1〕
2. 壺〔第20図4〕
3. 杯、蓋、円面鏡？(右下)
4. 瓢

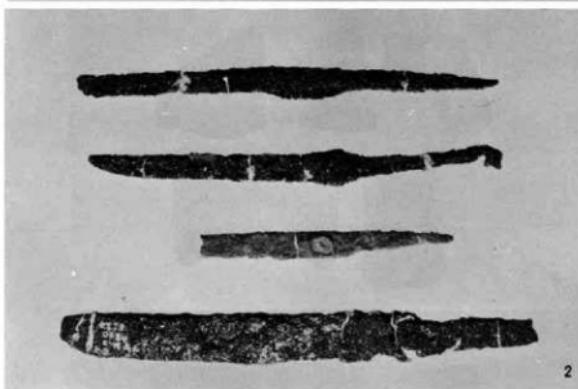


図版 10 墨書き土器

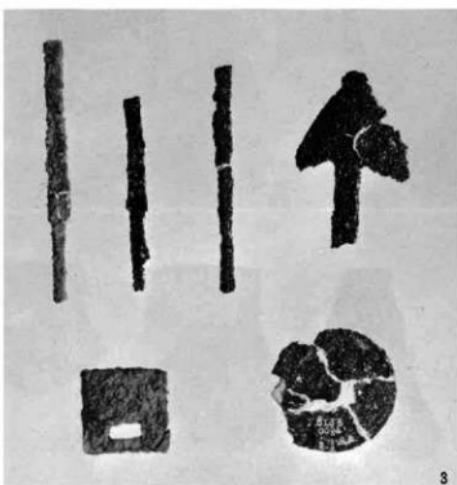
1. 「常陸口」須恵器高台杯
〔第 15 図 1〕
2. 「金」須恵器杯
〔第 9 図 5〕
3. 「金」ないし「全」須恵器杯
〔第 21 図 6〕
4. 「西？」土師器杯
〔第 21 図 1〕



1



2



3

図版 11 ヘラ描き土器・鉄製品

1. 左:「金」ないし「全」須恵器壺

〔第19図7〕

右:須恵器杯

〔第22図3〕

2. 刀子・小刀

3. 鉄鐵・方形鉄製品

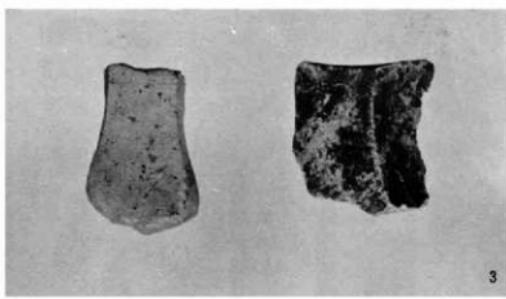
(巡方か)・紡錘車



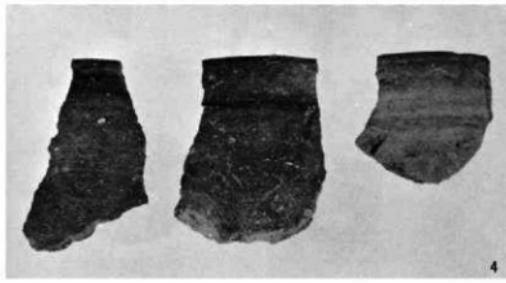
1



2



3



4

圖版 12

1. 瓦 (凸面)
2. 瓦 (同上凹面)
3. 砧石
左 [第 12 圖 12]
右 [第 8 圖 8]
4. 中世陶器 (搗鉢)
左 [第 22 圖 4]
中 [第 20 圖 6]
右 [第 21 圖 11]

多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第4冊

伊治城跡

—昭和53年度発掘調査報告—

平成54年3月25日 印刷

平成54年3月31日 発行

編集兼発行者 宮城県教育委員会

宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市浮島字宮前133

T E L (02236) 5-0101

印刷所 小泉印刷株式会社
